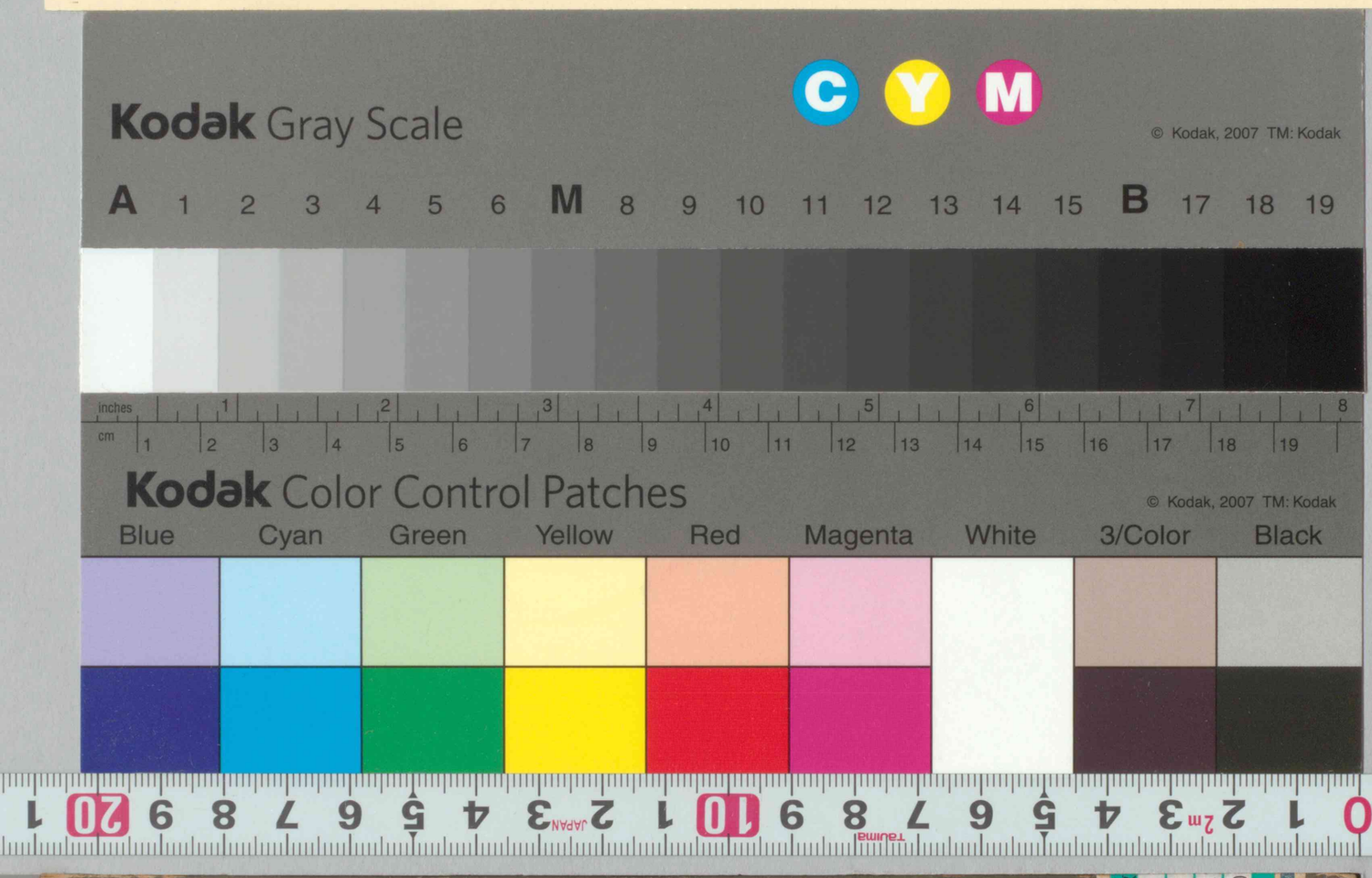
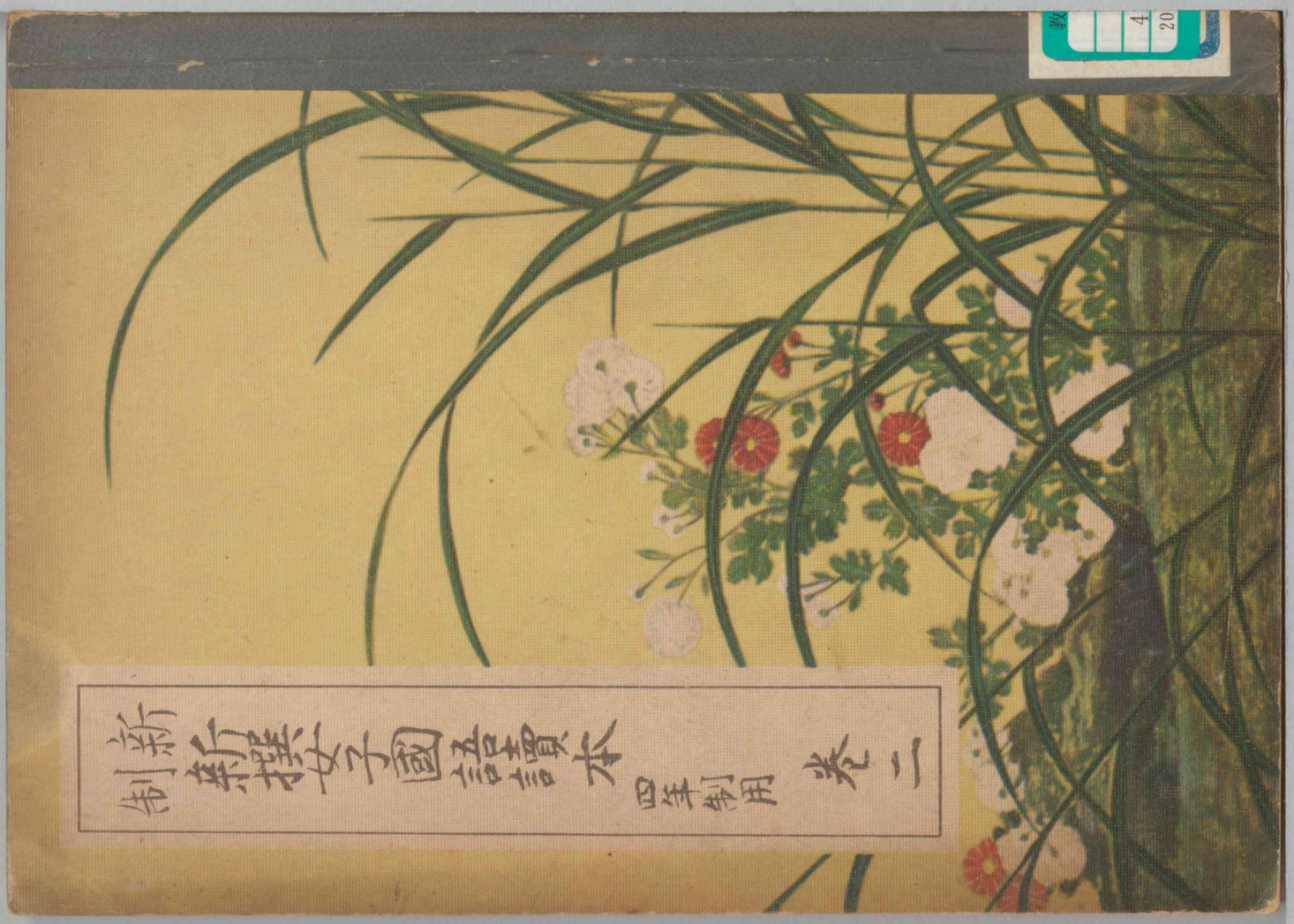
42398
教科書文庫
4
810
42-1941
2000030
1495





昭和十年六月二十九日
文部省檢定濟
用科語國校學業實・用科語國校學女等高

教科書文庫
4
810
42-1941
2000301495

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

新制 新撰女子國語讀本

四年制用

湯川弘文社

広島大学図書
2000301495

資料室
375.9
Sa19

黑き猫

菱田春草筆

廣島大學圖書之印

廣島大學教 39762 圖書

新制

新撰女子國語讀本　卷二

目次

一　空の初旅　鈴木文史朗　一
二　美しき球　矢島鐘二　六
三　武藏野　國木田獨歩　一一
四　勞苦と快樂　小酒井不木　一九
五　あてになる人　德富蘇峰　二九
六　良寛　三六

一　童心　北原白秋　三六
二　手鞠つきつゝ　良寛　四四
七　心の旅　島崎藤村　四六
八　菊花の德　棚橋絢子　五〇
九　皇后陛下　下田次郎　五四
一〇　皇太子殿下御浴湯の儀に奉仕して　市村瓚次郎　五九
一一　紋章　沼田頼輔　六七
一二　我が國の家庭　芳賀矢一　七七
一三　野口英世の生家　橘輝政　八四
一四　實業の精神　武藤山治　八九
一五　小春の田園　長塚節　九四

一六　故郷の冬　島木赤彦　一〇三
一七　雪　堀口大學　一一一
一八　小夜の中山　中川一政　一一四
一九　わが幼時　〔折焚く柴の記〕　一二三
二〇　非常時の用意　今井邦子　一二九
二一　滿蒙の天地　上田恭輔　一三四
二二　爽やかな心　河野省三　一四二
二三　伊勢參宮　五十嵐力　一五三

〔自修文〕

一　蟻と蜜蜂と鳩　鶴見祐輔　一五八

二　井堰を切る　中村吉藏　一六七
三　吾輩と勘左衛門　夏目漱石　一七六
附錄
片假名・平假名の字源
國語假名遣表

廣島大學圖書之印

新制 新撰女子國語讀本　卷二

一　空の初旅

ダヌンチオは僕に向つて、

「あなたは、飛行機に乗つた事がありますか。」

と問うた。

「一度もありません。」

と答へると、

「そりや是非乗つて見る事だ。實に愉快なものだ。今か

ダヌンチオ　イタリーの詩人。小説家。愛國の志士。（一八六三―一九三八）

操縱 サウジユウ。

全幅 ゼンプク。有の幅一ぱいのこと。こゝではあらん限りの義。

墜落 ツヰラク。

躊躇 チウチヨ。しりごみすること。

らでも直ぐお乘りなさい。」

と言ふ。傍に居たフェラリン中尉も同じ事を繰返して、

「私が操縱しませう。是非乘つて御覽なさい。」

と勸める。

實際の處、その頃僕は飛行機に全幅の信用を置いてゐなかつた。イギリスやフランスでも、時々飛行機慘事の新聞記事が出た。現にイタリーでも、數日前に大旅客機が墜落して八九名の死傷者が出たことが、大きく新聞に出てゐた。併し、この場合躊躇するのは、いかにも臆病者を自分一人で代表するやうな氣がしたので、

「是非乘せていたゞきませう。」

ローマ イタリーの首府。

頑丈 グワンヂヤウ。

堆積 タイセキ。

と言つてしまつた。全く、言つてしまつた形であつた。それから直ぐに、ローマ市郊外のチェントーチェリーの陸軍飛行場へ自動車で案内され、兩翼の長さ三間にも足りない、小さなしかし見るからに頑丈なスヴァ戰鬪機へ乘せられた。

ローマ市の俯瞰

ローマの市街やその近郊は、地上から觀たのと空中から觀たのとでは、全く別である。

この有名な古都は、夏行つて見ると、日照りの結果、乾ききつた白い埃が到る處に堆積し

タイバー河　ローマ市を流れて地中海に注ぐ。
殺風景　趣なき樣子。
流域　リウヰキ。
カラカラ帝　ローマの皇帝。（在位二一一—二一七）
ドーム　圓天井。
大闘技場　劍闘士の闘技場。

て、市全體がかさ〳〵して厭な氣持であるが、機上から眺めると、綠樹が到る處に茂り、すが〳〵しい感じさへ與へる。橋の上から見たタイバー河は、水が何時も黃色く濁つてゐて、これがあの有名な川かと、殺風景なのに失望させられるが、一千米の高さから見下すと、白蛇が疾走してゐるやうに、曲りくねつた流域のほとんど全體が見え、水面は銀色に輝いて美しい。　カラカラ帝の大浴場の跡、サン-ピエートロ寺院のドーム、大闘技場の跡など、地上ではその巨大さに驚かされるものも、上空からはたゞ子供の玩具の積木や帽子のやうに可愛い目標に見えるだけである。

僕は頻りに下界の景色を眺めてゐたが、われ知らず押へ

名狀し難い

如實　ニヨジツ。
俯瞰　フカン。見下すこと。
鈴木文史朗　名は文四郎。朝日新聞社社員。千葉縣の人。明治二十三年生。

難い微笑が浮んで來て、名狀し難い嬉しさ心地よさがこみ上げてくるのを、ひし〳〵と感じた。

何事でもさうに違ひなからうが、飛行機も始めて第一回に乘る時の感覺が最も素晴らしい。　第一に空中を飛ぶといふ人間の夢が、如實に自分の身の上にも實現された感激がある。　それに生れ落ちた時から水平に見慣れた地上の景色を、地上と全く絕緣して、上空から俯瞰することにより、物象の姿が一瞬にして變化してしまふ一種の怪奇感がある。　僕はローマ全市の上を飛びながら眺めた時の、あのすさまじい感覺を忘れることが出來ない。

（鈴木文史朗—空の旅地の旅）

戰　大正十年九月、庭球デヴィス・カップ戰に於ける清水善造と米國選手チルデンとの試合。

グラウンド　運動場。

二　美しき球

戰の幕は切つて落されました。こゝ紐育を距る二十哩、理想的運動場として名あるフォレストヒルの清らかなグラウンドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな氣分が漂うてゐました。老幼男女を問はず、世界各國の人々が、鮨詰のやうにひし〳〵とグラウンドの周圍に寄り重なつて、兩選手の出場を今か〳〵と待ち構へてゐました。チルデン君の上に幸福あれと祈る人の心と、清水君の上に光榮あれと祈る人の心とが、平和な光の中に照り映えてゐました。

凜乎　リンコ。

慘澹　サンタン。

苦衷　クチユウ。

囁く　ササヤく。

火蓋を切る　龍虎の爭

瞳　ヒトミ。

取亂す　あわてたる樣子。

此の光の中に、此の無聲の應援の中に、凜乎たる決意と慘澹たる苦衷とを想はせながら、二君は微笑を浮べてテニスコートに現れました。チルデン君は身長六尺二寸、清水君は五尺四寸五分、まるで大人に子供が立向つたやうでありました。觀覽席で、「氣の毒だが、清水君は駄目だらう。」と、囁くのが、清水君の耳にも聞えました。

愈〻火蓋は切られました。隙を窺ひ虛を衝く龍虎の爭が始まりました。秒一秒、チルデン君と清水君との球は冴えて來ました。觀覽者は、球の動くがまゝに、その瞳を忙しさうに動かしてゐました。その瞳に、いたはしや片足蹈み辷らしたチルデン君の取亂した姿が映りました。米國人は

驚倒（キャウタウ。）
躍起

眉宇（ビウ。）
侮蔑（ブベツ。）
報いる

驚倒しました、躍起となりました。此の時です、清水君がチルデン君の血走つた目先に、取亂した足許に、柔らかい程のよい球を送つてやりましたのは。この瞬間、

「ミスター・シミヅ！」

といふ歡呼の聲と共に、米國人三萬の手が林のやうに一齊に振上げられました。あゝ、この一事、清水君も清水君ですが、米國人もさすがに米國人であると思ひました。

初めコートに出た時、チルデン君の眉宇の間には、清水君に對する侮蔑の情がありく〳〵と浮んでゐましたので、心ある米國人は、少からずひやく〳〵してゐたやうでありました。ところが、清水君は、この冷たい侮蔑に報いるに、溫情春のや

妙技

勝を制す
開闘（カイビヤク。）

デヴィスーカップ
富豪デヴィスが庭球奬勵の爲に寄贈せるカップ。世界名國の選手によつて競技を行ふ際に贈る庭球界最高の優勝カップ。

うな球を以てしたのでありますから、その深切は電氣のやうに米國人の胸にも響いて、感謝感激が心の底から涌上つたことでありませう。勿論、應援に來場してゐた日本人は、盛んに歡呼しました。

この敵味方總掛りの歡呼は、清水君の單なる妙技に對して發したのではなくして、その精神に對する力强い感激から發動したのであります。時は一點一分を爭ふ時でありました。五月・六月・七月・八月の四箇月に亙り、十二箇國の選手を薙倒して、最後の決勝に入つた時でありました。若し今明二日間の米國選手との競技に於て勝を制したなら、日本開闘以來のデヴィスーカップを獲得することの出來る時

でありました。この貴重なる時に於て、チルデン君の窮地を見て溫情のこもつた球を送つた清水君は、實に偉いと思ひます。しかも清水君が、所謂「汝は汝にして汝にあらず。」で、日本を背負つて立つてゐる時であります。この時に於て神州男兒の意氣を各國人の面前に如實に發揮したことは、實に敬服の外はありません。清水君のこの貴く美しい精神は、蓋し長へにその光彩を放つことでありませう。

（矢島鐘二―スポーツマンの精神）

矢島鐘二　教育家。群馬縣の人。明治十六年生。

汝の敵を愛せよ
人は一代名は末代

（俚諺）

三　武藏野

武藏野を散歩する人は、路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ず其處に、見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞ其の縱横に通ずる數千條の路を、當もなく歩くことに由つて始めて獲られる。春・夏・秋・冬・朝・晝・夕・夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此の路をぶら〳〵歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を滿足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はしみ〴〵感じてゐる。武藏野を除いて、日本にこんな處が

時雨　シグレ。
隨處

那須野
栃木縣の那須山麓の廣野。

何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。其の外何處にあるか。林と野とがかくも能く入亂れて、生活と自然とがこの樣に密接して居る處が何處にあるか。武藏野にかゝる特殊の路のあるのは、實に此の故である。

國木田獨歩

されば、君若し一つの小徑を行き、忽ち三條に分るゝ處に出たら、困るに及ばない。君の杖を立てて倒れた方に行き給へ。或は其の路が君を小さな林に導く。林の中程に到つて又二つに分れたら、其の小なる路を選んで見給へ。

萱
カヤ。屋根を葺くに用ひるすゝきやちがすげ等の草の總稱。

尾花
薄の花。花の形が獸の尾に似たるを以ていふ。

小春
陰曆十月頃をいふ。

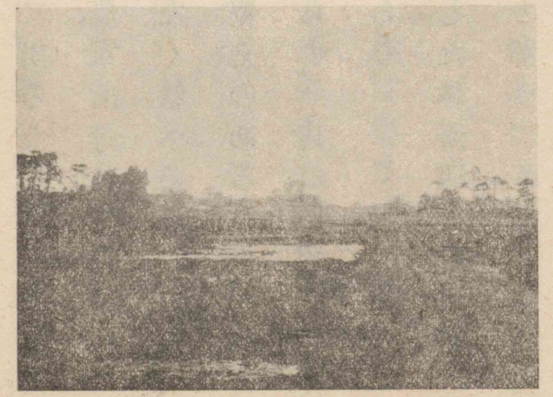
或は其の路が君を妙な處に導く。其處は林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ竝んで、其の前に少しばかりの空地があつて、其の横の方に女郎花などの咲いて居ることもあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて、君の前に見渡しの廣い野が開ける。足元から少しだらだら下りになり、萱が一面に生えて、尾花の末が日に光つて居る。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、其の林の上に遠い杉の小森が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つて居て、雲の色にまがひさうな連山が其の間に少しづつ見える。小春の日の光がのどかに照り、小氣味よい風

澄んで
澄みて
潯ホトリ。

がそよ〳〵と吹く。若し萱原の方へ下りてゆくと、今まで見えた廣い景色が悉く隱れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が、萱原と林との間に隱れて居たのを發見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の潯には枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池の潯の徑を暫く行くと、又二つに分かれる。右に行けば林、左に行けば坂、君は必ず坂を登るだらう。兎角武藏野を散歩するのに、高い處高い處と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望を求めるからで、それで其の願は容易に達せられない。見下すやうな眺望は決して出來ない。それは初めから諦めたがいい。

慇懃インギン。
應揚オウヤウ。

若し君、何かの必要で路を尋ねたく思ふなら、畑の眞中に居る農夫に聞き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲をあげて尋ねて見給へ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽子を取つて慇懃に問ひ給へ。應揚に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。



武藏野

教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へられた方の路は、餘りに小さくて少し變だと思つても、其の通りに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいけない。其の時農家で尋ねて見給へ。「門を出るとすぐ往來ですよ。」と、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覺えのある往來。成程これが近路だなと、思はず微笑をもらす。其の時始めて教へてくれた人の有難さがわかるだらう。

眞直な路で、兩側共十分に黃葉した林が四五町も續く處に出ることがある。此の路を獨り靜かに歩むのはどんなに樂しからう。右側の林の頂には夕日が鮮かに輝いて居

すげなく

輝いて
鮮きて

る。折々落葉の音が聞える許り、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落ち盡した頃ならば、路は落葉に埋もれて、一足毎にがさ〳〵と音がする。林は奥まで見すかされ、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。尙更人に遇はない。愈淋しい。落葉を蹈む自分の足音ばかり高く、時々慌しく飛去る山鳩の羽音に驚かされるばかり。

同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて、別な路を當もなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を得ること

慌しく
アワタゞしく。

行暮れる

暗澹
アンタン。

新月
三日月のこと。

山は暮れて
與謝蕪村の句。

國木田獨歩
名は哲夫。小說家。千葉縣の人。明治四十一年歿。年三十八。

がある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群がる雲は黃金色に染つて、見るが中に樣々の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖の樣な雪が次第に遠く北に走つて、終りは暗澹たる雲のうちに沒してしまふ。

日が落ちる。野は風が强く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れんとする。寒さが身に沁む。其の時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯林の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然又野に出る。君は其の時、

山は暮れて野は黃昏の薄かな

の名句を思ひ出すだらう。

（國木田獨歩――武藏野）

四　勞苦と快樂

憂き事のなほこの上につもれかしかぎりある身の力ためさん

これは名高い古歌であるが、誰の作ともはつきりした事は分らない。しかし、この歌を口ずさめば、大抵の人間はぐづぐづしてゐられなくなるであらう。そして自分の過去を振返つて、恥づかしさに堪へぬ氣持がして來るであらう。そしてまた憂き事、苦しき事に一種の樂しみと勵みとを見出すやうになるであらう。

凡そ仕事と名の附く以上は、どんな仕事でも必ず苦しみ

グラッドストン　十九世紀に於けるイギリスの大政治家。（一八〇九―一八九八）

報酬

の伴なふものである。成功の祕訣は、この事實を覺悟して、仕事その物に眞の興味を見出し、勞苦その物に眞の愉快を覺えるのにある。昔から世に優れた人は、何れも仕事をする事に無限の喜びを感じ、勞苦その物にこの上ない幸福を感じた人であつた。イギリスの大政治家グラッドストンは九十歳近くになつて、「私は勞苦に最大の幸福を發見した。私は若い時分に勤勉の習慣を附けたが、この勤勉の習慣を附けたといふその事が、勤勉に對する立派な報酬であつた。若い人は、多く休息といふ事をば、努力を中止するといふ意義に解釋する樣であるが、私は眞の休息とは、一つの努力から他の努力に移る事だと思ふ。」と言つてゐるが、誠に尊い教

餘生

エヂソン　アメリカの科學者・發明家。蓄音機・活動寫眞・無線電話・炭素線白熱燈等の發明あり。（一八四七―一九三一）

訓である。

偉大な人々は、決して餘生を安樂に送る爲に勉强する者ではない。彼等は勉强する事に快樂を感ずるので、隨つて死ぬまで最大の努力を續けようとする。かのアメリカの發明王エヂソンは、「私は一つの發明を完成すれば、まうその發明に用がない。多くの人は、發明から來る收入を、努力に對する報酬の樣に考へるかも知れぬが、私自身は少くともさうは思はぬ。私の最大の喜びは、努力して仕事をする事である。」と言つたといふが、これで考へてみても、偉人の精神の据ゑ所を知る事が出來るであらう。

偉人とか天才とか言はれる人には、生れつきよりも寧ろ

ラファエロ　イタリーの畫家。（一四八三―一五二〇）
ミケランジェロ　イタリヤの彫刻家・畫家・建築家・（一四七五―一五六四）
至言
ミレー　（一八一四―一八七五）

勤勉によつて才能を發揮した者が多い。いかによい素質をもつてゐても、捨てて置いて光る道理がないわけである。有名な畫家ラファエロをミケランジェロが批評して、「彼の偉大は、彼の天才よりも寧ろ彼の勤勉に負ふ所が多かつた。」と言つたのは至言である。ラファエロは僅かに三十七歳で亡くなつたが、それにも拘らず、實に二百八十七枚の繪と、五百以上の素描とを遺した。或人がラファエロに向つて、「どうしてこんな偉大な仕事が出來ましたか。」と尋ねたら、彼は優しい聲で、「私は小さい時分から何事をもよい加減にしなかつたのです。」と答へたといふ事である。フランスの有名な畫家ミレーも、「私はすべての少年に向つて、唯働けと忠

ホレース・マン　（一七九六―一八五九）

告するだけである。皆が皆天才になる事は不可能であるかも知れぬが、皆が皆、仕事をする事は可能である。どんな天才でも、仕事をしなければ何にもならぬ。」と言つてゐる。

一體、人といふものは、とかく他人の仕事を羨ましがるものである。それはどんな仕事でも、表面は樂な樣に見えるからで、隨つて他人のやつてゐる仕事にたづさはつてみると、始めてその苦しさが分つて、自分のもとの仕事がこひしくなつて來るものである。若し、すべての人が仕事をする事その事に快樂を感ずるならば、仕事の種類は問題でなくなるであらう。だからアメリカの教育家のホレース・マン

左右する

汙染　ヲセン。よごれること

孜々として

毛頭

ソロモン　昔西部アジヤにありしイスラエル王國第三代の王。明君として名高し。（西紀前凡一〇一〇—九七四）

タイラー　アメリカ合衆國第十代の大統領。（一七九〇—一八六二年）

といふ人も、「自分の現在の仕事を嫌つて、他の仕事に移る人の氣が知れない。私に取つては、仕事をする事その事が、魚の水に於ける樣な關係になつてゐる。」と言つてゐる。

どんな職業に從事してゐても、その職業は決して人間の品性を左右するものではない。それに從事する人の心の如何によつて、その職業が卑しくもなり、また尊くもなるのである。また職業の爲に手や足を汙染する事は、決してその心を汙染するのではなくして、寧ろ淸淨ならしめるのであると言つてもよい。外見の穢い職業に孜々として働いてゐる人の姿を見れば、崇高な感じこそすれ、穢いといふ感じは毛頭もしないものである。だからソロモンの箴言にも、「汝かの事務に勤勉なる人を見ずや。彼は國王の前に立つ事を得べし。」とあつて、いかに勤勉の尊いかを敎へてゐるのである。

アメリカ合衆國の大統領タイラーが、任期が滿ちて退職すると間もなく、その政敵は彼を醜弄する積りで、彼をその居村の測量師に選んだ。タイラーは厭がるかと思ひの外、喜んでその職を引受け、しかも一所懸命にその仕事に從つた。これには流石の政敵等も降參して、「まういゝ加減に辭職してはいかゞですか。」と言ふと、タイラーは平然として、「私はどんな仕事でも引受けるが、一旦引受けた以上、決して辭職は致しません。」と返答したといふ事である。

小人閒居して云云　大學にある句。孔子の語。

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を種々の危險から遠ざからしめるものである。「小人閒居して不善を爲す。」と古言にも言つてゐるが、小人に限らず、すべて人間といふものは、ぼんやりしてゐる時に、決してろくな事を考へるものではない。犯罪學上の統計を見ても倦怠が各種の犯罪の極めて重大な原因となつてゐるのである。また或人は、「事務のうちに成長しない者は、最も下劣な人間だ。」と言つてゐるが、私は寧ろ「仕事をしない者は最も危險な人間だ。」と言ひたいと思ふのである。

何事をするにも、人はとかく仕事を早くし遂げたいと希望するものである。いはば成功を急ぐのであるが、これも

ダーウィン　イギリスの自然科學者。進化論・遺傳の法則を以て有名なり。（一八〇九―一八八二）

ゴールドスミス　イギリスの詩人（一七二八―一七七四）

急がずば云々　太田道灌の慕景集に出づ。

ギボン　イギリスの歴史家。（一七三七―一七九四）

畢竟するに、勤勉勞苦そのものに快樂を發見し得ない爲で、眞に勤勉な人は、一面から言ふと、頗る氣の長いものである。ダーウィンは、みゝずの研究に對して、實に前後三十年を費してゐる。文豪ゴールドスミスは、「一日に四行づつ書けば十分だ。」と言つて、名高い「荒村行」を書くのに前後七年を費した。しかも彼はその四行を書くのに一日かゝつて、うんうん言つて苦しんだといふ事である。

急がずばぬれざらましを旅人のあとより晴るゝ野路の村雨

といふ歌もある通り、成功を急ぐのは、決して成功をもたらす所以ではない。有名なローマ衰亡史を書いたギボンは、

スタンレー　イギリスのアフリカ探檢家。（一八四一―一九〇四）

小酒井不木　名は光次。醫學博士。小說家。愛知縣の人。昭和四年歿。年四十。

その第一章を三度書直して、始めて滿足したと言はれてゐるが、全篇を完成するのに實に二十五年の歲月を費したのである。人間はいかに努力勉强しても、若し勞苦そのものに快樂を覺えるならば、決して過勞といふ現象は生じない。過勞の生ずるのは、畢竟成功を急ぐか、又は勤勉勞苦に興味をもたぬからである。それ故アフリカの探檢家のスタンレー卿も、「たとひどんなに激しい仕事をしても、しつかりして、規則正しく進んで行くならば、決して身體を害するものではない。」と言つてゐる。實際、若し過勞の爲に病氣になつた人があれば、それはその人が仕事に對して興味を少しもたなかつた證據だと言つてよいであらう。（小酒井不木）

五　あてになる人

此の頃、或學校の卒業生あり、余に向つて成功の祕訣を問ふ。余未だ成功の何たるかを詳かにせず、況んや其の祕訣をや。然りと雖も、已むなくんば則ち一あり。曰く「あてになる人たれ」と。是、甚だ易きが如くにして、實は難し。如何に天才なりとも、如何に俊英なりとも、將た如何に勉强すとも、辛抱力逞しくとも、若しあてにならぬ人ならば、何人も彼を相手とせざるべく、また世の中が相持ちなる事を知らば、他より相手とせられざる人にして世に立たんこと頗る覺束なきを知らん。

恃む　タノむ。
括る　クヽる。

如何なる仕事にせよ、相手なきはなし。若し其の相手が吾を信用せざるに於ては、吾は何事をも爲す能はざるべし。人の上に立つには、下より信用せらるゝ必要あり。人の下につくには、上より信用せらるゝ必要あり。仲間同士に於ては、相互の信用必要なり。此の信用を具備する人を稱して、「あてになる人」と云ひ、然らざる人を稱して、「あてにならぬ人」と云ふ。

あてにならぬ人、必ずしも無能の人にあらず。否、中には自己の能力を恃みて、大概の我が儘氣隨を働きたりとて何の妨かあらんと、自ら高を括りて然する人もあらん。然り、社會は時としては、あてにならぬ人をも餘儀なくあてにせ

欣然　キンゼン。

ねばならぬ場合なきにあらず。されど是は社會が自ら好んで然するにあらず。已むを得ずして然するなり。故に若し機會あらば、社會は欣然としてあてにならぬ人をあてにせぬことにすべし。而してかくの如くして、多くの才物・英物は、社會の外に葬り去らるゝに至るなり。

あてにならぬ人といふにも、幾多の種類あり。或者は無責任なり。卽ち當然自己が爲さねばならぬ事を、惡意にはあらざる迄も、無頓著にて閑却するなり。彼は惡意なきを恃みとして、別段之を悔いざれども、相手の迷惑は惡意の有無に關係なきなり。「失念と云へば立派な物忘れ。」迷惑の程度は、失念と云ふも、物忘れと云ふも、事實に於ては同一な

飽性 アキシャウ。

巫醫 フイ。術のつたない醫者。

るを知らざるべからず。

或者は飽性なり。今日は此の事に熱中し、明日は彼の事に熱中す。人は化石にあらざれば、其の當然の徑路を辿り、尋常の順序を蹈んで變遷するは、決して差支なきのみならず、寧ろ精進の勇猛心を稱美すべしと雖も、一時の出來心に任せて、風のまに〳〵移り行くは甚だ危險なり。少なくとも相手をして甚しく危險の感あらしむ。孔子は「人として恆なくんば、以て巫醫にだも作ること能はず。」と云へり。恆なき人はあてにならぬ人なり。

又或者は責任も知り、恆心もあれども、已むを得ざる事情の爲に、一定の歩趨を以て日常の軌道を行く能はざること

金冕 キンベン。金のかんむり。

あり。而して其の事情の過半は健康問題に歸著す。卽ち心は矢竹に逸れども、其の體力之に順應せざるに於ては致し方なし。「才子多病」とはいへども、多病は決して才子の金冕にあらず。されば身體の健全を保持するは、あてになる人たる要件の一なり。然り、主要なる一なり。

凡そ今日に於て人を採るの法は、第一に其の健康如何にあり。第二に其の恆心如何にあり。第三に其の職分の念責任の感、如何にあり。此の三者具備するに於ては、才も不才も、それ相應にあてになる人たるを得べし。既にあてになる人たらば、世にこれをあてにせざるものなかるべく、過分の野心を懷かざる限りは、如何なる意味に於ても間違な

く成功を收むべし。

凡そ向上の工夫は反省に若くはなし。人若し我に向つて其の機密を語らずんば、我が他人の機密を護るに於て缺點あるを顧み、決して他を咎むべからず。苟も彼は如何なる場合に於ても、大事をうち明くべき人なりと信用せられたる曉には、大事にても小事にても必ず、與り聞くを得ん。人若し我に信頼せずんば、我は他人の薄情を憤るに先んじて、何故に斯くの如きかを點檢するを要す。何人も常にその相手を尋ね廻り居るものなり。若し我に於てそれだけの信用あらば、何人か我を相手とせざらんや。

諸葛孔明の一生は謹愼の二字にありき。虞翁は曠世の

諸葛孔明　名は亮。蜀漢の忠臣。（一八一—二三四）

虞翁　グラッドストンのこと。

人物として、君子的英雄として、一代の崇拜を集め得たれども、動もすれば其の部下より疑懼の念を懷かれたるは、彼が往々前後左右に頓著なく、乘氣にて乘出したることあればなり。別言すれば、聊かあてにならぬ氣味ありたるが爲なり。之に反して、諸葛孔明の如きは、何處迄もあてになる人たりしを以て、劉玄德が其の天下をも一家をも擧げて彼に託せしなり。

（德富蘇峰）

疑懼の念　ギクのネン。

劉玄德　名は備。蜀漢の昭烈帝。（一六一—二二三）

良寛　俗名は榮藏。歌僧。越後の人。天保二年歿。年七十四。（二四一八―二四九一）

聖心

越後　新潟縣の大部分をなす。

六　良　寛

一　童　心

聖心は童の心である。

越後の良寛禪師は、殊にこの童心の持主であつた。かういふお話がある。

一に童男童女、二に手鞠、三にお彈き。これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供たちと遊ぶことが、またどんなに嬉しかつたかが思ひやられる。

その良寛様も、子供たちには隨分ばかにされて盛んにな

遊びほれる

ぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一所懸命に遊びほれてゐた良寛様が有難い。

或時、例の通り子供たちと隱れんぼをして居られた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、「もういゝよ。」と、いふかはいゝ聲を、一心に待受けて居られる。と、ちやうど日の暮れ時で、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちらちらと點きだすと、子供たちは急に遊を止めて、一人のこらずこそ〳〵と歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛様もうつちやらかしである。無論いくら待つても「もういゝよ。」と、いふものはない。その中に日が暮れ、長い夜が來た。さうして、たうとう夜が明けてしまつた。良寛様はそれでも

一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ所に同じ姿をしたまゝ、もういゝよ。」と、子供が呼ぶのを待つて居られた。

二十日鼠　鼠の一種。形小なり。

その心の素直さ、さうしてそのままことの篤さ、正直さ。

それからまた或時のことである。良寛様が今度は隠れることになつた。そこで見つけられては大變だといふので、早速田圃の稲叢の中にもぐりこんで、それはかはいらしいことだ、小さくなつて、まるで二十日鼠みたいに、頭からすつぽりと稲藁を被つておど〳〵して居られた。すると子供たちは、また例の通り一人残らずこそ〳〵と歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存じがない。また日が暮れて夜が明けた。稲叢には霜が眞

やには

あどけなさ　無邪氣さ。

沙門良寛全傳　西郡久吾編、北越偉人沙門良寛全傳。

白に置き、朝の日が昇り始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稲束をやにはにはづすと、おやつと驚いた。良寛様が小さくなつて、もぐつて居られる。

「おや、良寛様が。」

といふと、あわてて、

「そつとしろ、そつとしろ。子供が見つける。」

その心のあどけなさ。有難さ。まるで子供である。

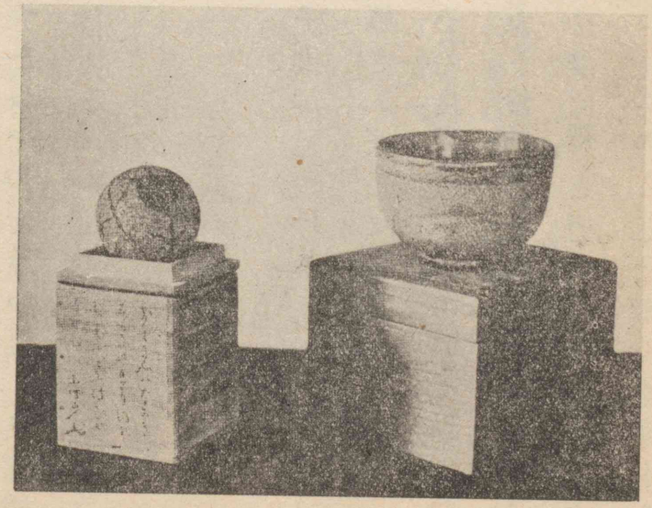
また或日のことである。その良寛様が、男の兒や女の兒たちとお彈きをして居られた。沙門良寛全傳に、「禪師頗る大勝を博して、賭物のいり豆を多く得。」と書いてあるから、よほどののり氣であつたらしい。ちやうどその時誰かが入

つて來た。そして、

「おや〳〵、良寛様、なか〳〵あなた様はお彈きが御上手で。」

と、褒めると、罪がないこと、良寛様はぽうつと面を赤くすると、まるで少女のやうに、さもさも恥づかしさうに、そつとそのいり豆を膝の下におし隱したといふ。その心の初々しさ、そのきまりのわるさ恥づかしさは、全く佛の前に

初々しさ



良寛の茶碗と手鞠

謙る（ヘリクダる、）

子供らしくおとなしく身を謙る心である。尊い聖心はすべてこの童心を源とする。

また或秋のこと、赤々と實がうれて、鈴なりになつた柿の木の下で、小さい子供が一人泣いてゐた。良寛様が通りかかつて、どうしたんだと圓い頭を撫でてやると、あの柿が食べたいといふ。

「よし〳〵、それではわしが取つてあげる。泣くのではないぞ。」

と、いひながら、やつとこさと木の上にはひあがつた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐる中に、それは全く旨さうな柿の實だ。一つ取つて口をつけると、それがおいし

をかし。

いのなんの。良寛様は夢中になつて、嚙るは〳〵まるで猿蟹合戰の赤いお猿のやうに、むしや〳〵と食べてゐる。下にゐる子供こそあはれである。それを見て火のやうに泣叫ぶと、初めて良寛様氣がついた。さあ、しまつた。これはといふのであわてて枝をゆさぶつたといふ話。思うてもそのあわて方のをかしさ、罪のなさ、眞正直さ、その子供らしさ、全く涙がこぼれるほど嬉しいではないか。

五合庵

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔から

天稟

上目

鰈 カレヒ。軟鰭類に屬する魚。

そのまゝである。それは何物にも替難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまた〳〵叩かれた。

「親を睨むやうな奴は鰈になるぞ。」

これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ家内中大心配であちらこちらと搜し索めると、或濱邊の岩の上に悄然と佇んで沖の方ばかり眺めてゐた。

「榮坊どうした。」

生一本
キイッポン。

といふと、榮坊いはく、

「おらまだ鰈にならねえか。」

鰈になるといはれたので、ほんたうに鰈になると思つて、一心に海を視つめて顫へてゐた童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。

（北原白秋―洗心雜話）

一　手鞠つきつゝ

霞立つながき春日を子供らと手鞠つきつゝ今日も暮らしつ

紀のくに
紀伊。和歌山・三重兩縣に亙る國名。

高野
和歌山縣の東北隅にある山。山頂に眞言宗の總本山金剛峰寺あり。

歌や詠まむ手鞠やつかむ野にやいでむ心ひとつを定めかねつも

紀のくにの高野の奥のふる寺に杉のしづくを聞きあかしつゝ

風はきよし月はさやけしいざ共にをどり明かさむ老のなごりに

秋の日にひかりかゞやくすゝきの穂これの高屋にのぼりて見れば

月よみ
月の異名。

月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの
多きに

（良　寛）

七心の旅

名もない草が、路ばたの石のわきに咲いて居ました。そこへ私が通りかゝりました。

「今日は。お前さんは何をそんなに急いで居るのですか。」

と、その草が聲をかけました。

精神の旅

小さな本

「わたしですか。わたしは貧しいものですから、讀みたい本も思ふやうには手に入りません。でも、わたしは好きですからいろ〳〵な本を讀んで、お友達に後れたくないと思ふのです。わたしは精神の旅をして見たいと思ふのです。わたしは小さな旅人です。それでかうして急いで居るのです。」

と答へました。すると、

「まあ、この石の上に腰をかけて見て下さい。讀まうとさへ思へば、本はこの石の上にもあります。わたしも名もない草ですが、あなたのやうな人に讀んで貰ひたいと思つて、かうして小さな本をひろげて居るのです。」

と、その草はいひました。

ある日、私は私の學校の圖書館の二階へ上つて見ました。そこでは高い聲で話をするものもありませんでしたから、まるでそこいらは森として居ました。たまに聞えて來るものは、鉛筆を削る音ぐらゐのものでした。私は本棚の間を見て廻りました。本と本とが澤山むかひあつて竝んで居ます。誰も手に觸れたことのないやうな本が、塵埃の間から顏を出してゐるのもあります。椅子でも持つて來なければ、手の屆かないやうな高い棚の上まで、一ぱいに古い本が竝んで居ます。

書籍の墓地

そこは書籍の墓地でした。いろ〳〵な本を書いた人達が、その靜かなところで眠つて居ました。

ところが不思議にも此方ですこし眼をさましかけましたら、そこに眠つて居ると思へた人が、お墓から起上つて來ました。青々とした麥畑の中に鳴く雲雀の聲がして來たり、ひろ〳〵とした野原のほとりから百姓の唄が聞えて來たりした時は、私もびつくりしました。

その時になつて、そんな墓に眠つて居ると思つた人達が、私達の胸に活きかへり活きかへりする時のあることを知りました。

（島崎藤村―をさなものがたり）

島崎藤村　名は春樹。詩人。小說家。帝國藝術院會員。長野縣の人。明治五年生。

陰殺の氣
インサツのキ。

八　菊花の德

人の自然より受くる感化は偉大なるものがありますが、殊に婦人の身として、菊花より受くる感化は少くあるまいと思ひます。春の花、秋の花、夏の花、冬の花、各其の特色はありますが、春夏の花に比して、秋冬の花はやゝ寂しく感じられます。秋の花の、春の花に比して、一短一長あるは、其の季候の特色に從ふものでせうが、花としての價値は、どうしても春の花に多いやうで御座います。而も秋の花にありながら、暑さより寒さに赴く陰殺の氣を受けず、且秋の花の特色を失はずして、更に春の花の溫味と陽氣とを藏するものは、卽ち菊の花であらうと思ひます。

培養

菊の花が歌に詠まれ、詩に吟ぜられ、文章に書かれ、花瓶に挿され、花壇に植ゑられ、或は繪畫として、衣服の模樣として、種々の裝飾と娛樂とに供せらるゝは、古よりのことでありまして、永き歲月に亙りての培養により、殆ど理想的の花としての發育を見、是を人間に喩ふれば、模範的婦人の標本と稱すべきであらうと思ひます。是を古人に求むるに、紫式部の如きが、菊花に比せられようかと

菊花

思ひます。

天地間の美は、多く花に集り、花の美は、種々に分類されますけれども、未だ菊花の如く、種々の色彩と、香氣の馥郁たると、風姿の高尚優美なるとを併せ、花壽の長遠にして人に愛せらるゝものはありますまい。又程よき清香を吾等に送るものはありますまいと思ひます。而も風姿優婉にして、高ぶらず、皇室の御紋章となつてをりますのも亦その所以であらうと思ひます。

菊は、その本性、直く、歪み曲ることを忌むものであります。而も菊ほど柔順なものはなく、朴直なものはありません。人間の培養によつて如何やうにもなります。大きな輪の

馥郁 フクイク。香氣の盛んなるさま。
花壽 クワジユ。
優婉 イウエン。
朴直 ボクチヨク。

菊であつても、構はないと小さくもなる。育て方に依つて如何にもなる。菊は此の如く、婦人の特性、殊に柔順の德を表したるものと存じます。婦人も亦朴直にして柔順でなければならぬと思ひます。私の此の頃の腰折に、

こし折らぬ人のまことの菊の花本末なほくおもひたちけり

菊の造りやうによつて、如何やうにもなることは、私達の大いに鑑みねばならぬことと存じます。

（棚橋絢子―女らしく）

腰折 コシヨレ。腰折歌。自作の歌の謙稱。

棚橋絢子 教育家。東京高等女學校長。大阪市の人。昭和十四年歿。年百一。

聰明

藝術的

大和繪
土佐派の繪畫をいふ。日本畫の一種にして、古く平安朝初期にはじまり今日に至る。

織細
センサイ。

九　皇后陛下

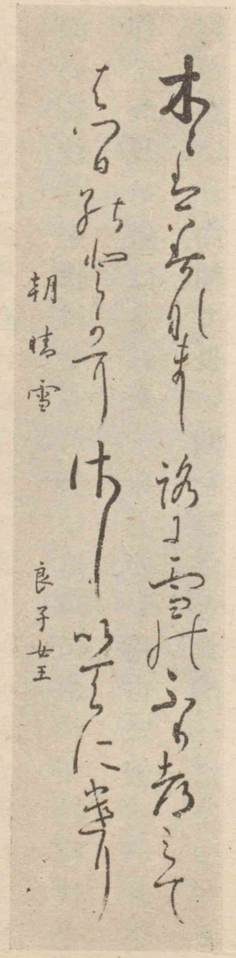
聰明に渡らせられる皇后陛下が、少女でおはした頃の御日常生活は、豐かな藝術的御趣味によつて、實に美しく拜せられた。「まあ何といふ美しいお聲なのでせう。」人々はその澄み渡つたソプラノ獨唱のお聲を洩れ聞いては、今更のやうに、それに引きつけられるのであつた。繪畫は學習院時代に木炭畫と水彩繪とをお學びになつたが、その後は大和繪をお描きになつた。お手先の優れて器用で綿密なお方なので、大和繪の織細な線で、人物や風景をお取扱になるのには、いかにも御ふさはしかつた。書にも大層趣味深く

手かき
書の巧みな人。

石摺
イシズリ。石碑などの字を紙に摺りとりたるもの。

木々はみなましろに雪のふりつみてはつ日のとかにさしいてにけり
朝晴雪
良子女王

あらせられて、お習字を遊ばされぬ日はほとんどなかつた。御書風なども、舊い手かきの石摺や手本をお集めになつて、御自身にその長所をお選びになり、飽かず御勉强遊ばされた。



皇后陛下御筆
（久邇宮家御所藏）

また講話會などには、いつも御出席になり、御歸邸の後は、必ず講話の要領を周圍の人に御物語り遊ばされるのであつた。是等の御研究は、たゞ少女でおはした頃だけでなく、

いそしむ

輕快

薙刀 ナギナタ。

其の後と雖も、日毎に課業を御いそしみ遊ばされて、國語・漢文・和歌・佛語などの御進境は、驚かれるばかりであつたと承る。

かうして、御學藝に御多忙であらせられた間にも、體育に深い御注意を拂はせられ、特に庭球にあつては、輕快な御動作をお見せ遊ばされた。薙刀のお稽古に、優しいお姿の姫宮が、輕いお筒袖で、長い柄をひたとお構へになつて、きつとお相手に向はせられ、忽ち澄み透る御掛聲で「やつ」と打込ませ給ふ御形、何とも申上げやうもなかつたと傳へられてゐる。かうした運動家であらせられたため、箱根その他に成らせられると、お附の人達がこれはと御心配申上げるやう

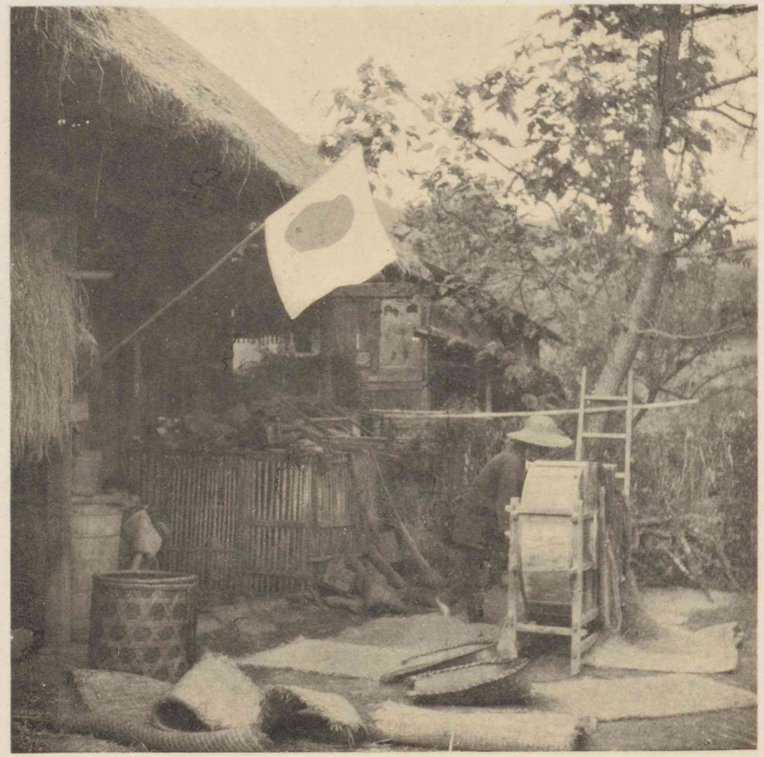
澁谷 東京市澁谷區。

齋き祀る イツきマツる。

な山坂をも、眞先にすた〳〵とお歩きになつた。その頃既に、御身の丈が五尺を越えた完全な健康體であらせられた。

澁谷の久邇宮御殿の側に、さゝやかなお畑がある。その半ばは四季の草で滿たされ、半ばは秋が來れば黃金色の稻が實つた。それもこれも、すべては姫宮がお手づからの御丹精に由るものであつた。そして、姫宮は、この新穀を白木の三方に載せて、あの森の中の神殿に齋き祀つてある皇大神宮の御前に捧げられた。

御自身の事は決して人手を借りずに遊ばされると共に、他人に對する御同情の深くあらせられたことは、數々の御作文によつても窺ひ奉ることが出來た。これらの御文章



藁屋

などを拜したものは、何れも有難いことと語り合つたことであつた。

かうして少女でおはした頃の陛下の御德の一端を窺ひ參らせただけでも、年頃近侍の人達が一齊に、「完成せられた美しい御女性」と讃美し奉つたことの、道理であるのを感じないものはあるまい。

（下田次郎―女子新修身書）

近侍の人　お側に奉仕する人。

下田次郎　文學博士。東京女子高等師範學校名譽教授。教育家。廣島縣の人。昭和十三年歿。年六十七。

皇后陛下御歌

田家朝

この年もみのりよかれといのるらむ小田のさと人朝日をがみて

皇太子殿下
繼宮明仁親王。

瑞雲
靉く
タナビく。

津々浦々

辻博士
文學博士辻善之助。

有馬大將
海軍大將有馬良橋。

大給子爵
大給近孝。

松浦子爵
松浦靖。

細川子爵
細川立興。

一〇　皇太子殿下御浴湯の儀に奉仕して

昭和八年の十二月二十三日の拂曉、瑞雲空に靉き、旭光地に輝いて、我が九千萬同胞の待ちに待ちたる皇太子殿下は御降誕あらせられました。宮中は勿論、國民歡喜の聲は、津津浦々にまで充ちわたりました。かくてその二十九日、即ち七日目に、御命名の儀が擧行せられ、更に御浴湯の儀に讀書鳴弦の式が行はせらるゝので、辱くも私は讀書の本役を仰付けられ、辻博士がその控に任ぜられ、鳴弦の方では有馬大將と大給子爵とが本役、松浦子爵と細川子爵とが控として奉仕することになりました。

かくて當日の午前八時に、我々奉仕の面々は、一同宮中に參殿し、別室にて衣冠單の裝束に著け更へ、やがて十時近くになりますと、奉仕の諸員は肅々と順に進んで、御浴殿の側の廊下に整列しました。すると皇太子殿下には、皇子御養育掛が御抱き申上げ、幾多の供奉の人々を從へられて、浴殿へ御入になります。同時に我々は、更に進んで、浴殿の對面の廊下に參列しました。浴殿の正面には白き

皇太子殿下

肅々

皇子御養育掛
小倉滿子。

廣幡皇后宮大夫
侯爵廣幡忠隆。
岡本事務官
皇后宮事務官岡
本愛祐。

幔幕が垂れて居り、その前の一間は讀書鳴弦の式場であります。

やがて合圖により、私は笏と卷物とを持ち、先づ進みて式場の中央に立ちますと、鳴弦の本役たる有馬大將と大給子爵とは、その後に少しく離れて、弓を持ちながら左右に分れて竝び立ちました。控の方々はやはり廊下に立つて居ります。時に廣幡皇后宮大夫と岡本事務官とは、その室の左隅に立つて居りました。やがて私は笏を懷にして卷物を開きますと、鳴弦の本役たる有馬大將は、極めて低音にて祈禱の詞を述べます。それが終ると、直ちに私は卷物の文を讀上げました。讀み了ると、鳴弦の本役は、左足を進め、引き

嫋々 デウデウ。音の長くひゞくさま。

靄然 アイゼン

天顔

しぼつた弓弦をひようとばかりに放つて「オー」と呼ぶ。弦聲は餘音嫋々として殿内に響きます。その消えやらぬ響の中に、私は重ねて卷物を讀み返しますと、同様に鳴弦も繰返されます。これが内親王の時は二回でありますが、親王の時には三回でありますので、我々は三度これを繰返しました。その間に御浴湯の儀は濟ませられて、御退殿になります。我々奉仕の諸員は元の處に退いて、奉送すること、奉迎の時と同じでありました。この間僅かに二十分に過ぎませんが、極めて嚴肅莊重なる中に、靄然たる和氣の漂へるを感じました。而して、式後我々は、内謁見所に於て　天皇陛下に拜謁仰付けられ特に天顔の麗しきを拜しました。

紫式部日記 紫式部が宮仕中の事どもを記したるもの。

寛弘五年 一條天皇の御代。（一六六八）

孝經 儒教經典の一。孝道に就いて錄す。作者未詳。

史記 黄帝より漢の武帝までのことを記せる紀傳體の歴史。司馬遷の著。

次いで侍從長の手を經て、兩陛下より賜物あり、且別室にて酒饌を戴いて退出したのであります。

親王及び内親王の御降誕の時に於ける御浴湯の儀は、極めて古い時代より行はれたやうに存ぜられますが、その平安朝時代の儀に就きては、紫式部日記に當時の有様が詳細に記されてあります。それは寛弘五年九月に、後一條天皇の御降誕遊ばされた時の事であります。その記事に據ると、御誕生の時より七日間、御浴湯の際に讀書鳴弦の儀が行はれたのであります。讀書卽ち文讀む博士は、一人に限らず、數人にて代る〳〵奉仕し、或は孝經を讀み或は史記などを讀みました。鳴弦は、つるうちと稱し、その奉仕の人員は

二十人にて、二行にならび立ちて弦を鳴らすのでありました。

明治の時代になりますと、宮中の種々の儀式を改定せられましたが、御浴湯の儀も、古禮を參酌して制定せられ、この復興せられたる御儀が、秩父宮殿下御誕生の時に、はじめて施行せられたやうに承つてをります。この儀式は、御誕生後七日目の御命名の儀の當日に行はせらるゝので、讀書には本役一人控一人、鳴弦には本役二人控二人の定であります。

さて、鳴弦は惡魔不祥を攘はるゝ意味もありますが、弓矢は男子の執るべきもので、武の意味を寓して居るやうに思

秩父宮
雍仁親王。大正天皇第二皇子。明治三十五年六月二十五日御誕生。

古禮

はれます。又、支那の上代に於ても國君の世子が生れた時には、桑弧蓬矢を以て天地四方を射るといふことが見えて居ります。

讀書の儀は支那には行はれず、日本のみに行はれたやうでありますが、これは文の意味が寓せられて居るのではないかと思はれます。故に讀書鳴弦の儀は、文武竝び備はらんことを期待する意味が含まれて居るのであらうかと思はれます。されば今回奉讀の書に就きては、特に日本書紀卷五崇神天皇紀の十年の處を選んだ次第であります。

その内容は、諸〻の公卿に詔して、教化を重んじ神祇を禮することを告げ、使を遠國へ遣してその趣意を知らしめたこ

世子
桑弧蓬矢云々
禮記にあり。

日本書紀
神代より持統天皇に至る漢文の編年體の歴史。養老四年撰進。

四道將軍　崇神天皇十年九月、大彦命を北陸に、武渟川別を東海に、吉備津彦を西道に、丹波道主命を丹波に遣す。

市村瓚次郎　文學博士。東京帝國大學名譽教授。前國學院大學學長。帝國學士院會員。茨城縣の人。元治元年生。

と、及び四道將軍に命じて、その教を受けざるものがあつたならば、これを征伐せよとの詔であります。即ち文に偏せず又武に偏せざることが分りませう。

今やこの非常時に際し、慶賀すべき皇太子殿下の御降誕に臨み、御浴湯の儀にこの一章を讀上げることを得ましたのは、まことに一生の光榮で、深き感激の情に堪へません。但、紫式部のごとき才筆を持ちませんのが遺憾の極みであります。

（市村瓚次郎）

遺憾　山内侯爵家　舊土佐高知藩主の家。

替紋　カヘモン。正式の紋所のかはりに用ふる紋。

白耳義　ベルギー。オランダの南に接し、ドイツ・フランス兩國の間に介在する獨立王國。

二　紋　章

我が國では、家があれば苗字があります。そして苗字があれば必ず紋所があり、近頃は白襟黑紋附とも申す位で、禮服には必ず紋所を附けることになつて居りますが、さて其の紋所に關する知識はといふと、由來は勿論、名前すら知られてゐない場合が澤山あります。私は常にこれを遺憾として居りましたが、先年山内侯爵家の家史編纂を依頼されて居りました頃、同家で桐の替紋を用ひて居られることについて理解しかねて困つたことがありました。又その後、歐洲大戰爭の終らうとする時分に、或新聞社から白耳義國

動機

沒頭

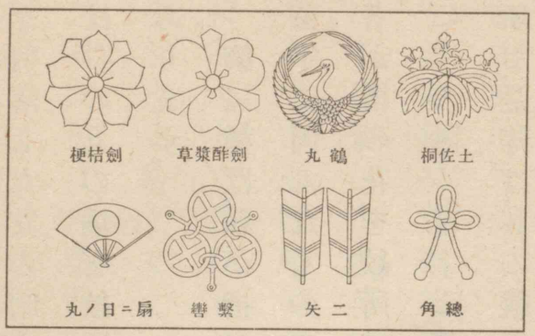
武張つた

王に鶴丸の紋の附いた太刀を獻上する企があり、同社の海外特派員が、その紋所の由來につき邦人に尋ねたが解らなかつたため、英國の紋章學者に尋ねて、御下問の折の參考にしたといふことを聞き及んで、甚だ遺憾に思つたことがありました。　さやうなことが動機となつて、私は紋所の研究に沒頭することになりましたが、その取調べに基づき、我が國の紋章が、どう言ふ意味で用ひられたかといふことについて、極めて大體のお話をして見たいと思ふのであります。

我が國の紋章といふものは、本來、武家時代に、或標章を旗や幕の目印として使つたのに始まつたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのであります。　例へ

脛楯

尙武的紋章



ば、劍酢漿草・劍葵・劍桔梗などいつて、劍を花の間に取合はせて居るのがそれで、それのみならず、兜の鍬形や總角や、脛楯や、其の他弓矢は勿論、武器に關するものは、悉く紋所に用ひられて居るといつてもよいのであります。　但しかう言ふ武張つた紋所は多く武家に用ひられたので、お公卿衆には、斯樣な紋所を用ひて居るのが少しもありません。　それ故私は、この種類の紋所を、尙武的紋章と申して居ります。

是を第一種として、第二種は、戰爭の際の功名手柄を後世

記念的紋章

に傳へる爲に作つた紋章で、私は是を記念的紋章と名づけて居ります。例へば、源平屋島の戰に那須與一が平家の扇を射落した、其の晴やかな功名を偲ぶ爲に、其の子孫の中には、日の丸の扇を紋所に用ひて居るものがあるといふ事であります。

指示的紋章

第三種は、私が指示的紋章と名づけて居るもので、概して苗字に因んだものであります。例へば、吉野といふ苗字の者が櫻の花を紋所にし、堀井・酒井・駒井・井伊・澤井などいふ井の字の附く苗字の者が、井の字或は井桁・井筒などを用ひる類で、是等は其の紋所を見て、是が何家の紋所かといふ事がすぐに指示されるやうに作られたものであります。近藤・

瑞祥的紋章

遠藤・伊藤・佐藤・加藤・工藤・内藤といふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ひて居るのも、此の種類に屬します。

第四種は瑞祥的紋章であります。卽ち延命長壽とか、或は子孫繁昌とか、又は福德圓滿等の如き意味をもつてゐるもので、古來緣起の善いものとして取扱はれたものは、大抵紋所として用ひられて居ります。例へば鳳凰・松・鶴等の如きものであります。

尙美的紋章

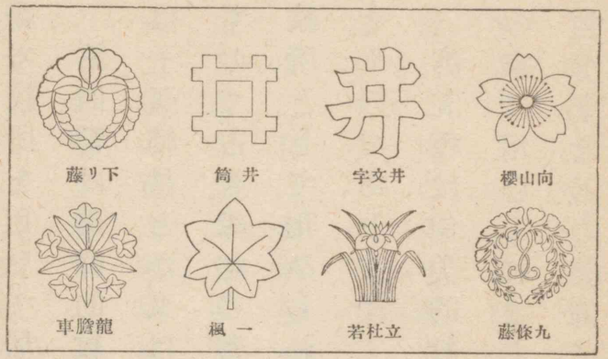
第五種は、尙美的紋章と言ふので、これは多くお公卿さんの家に用ひられました。お公卿さんには、家々によつて、衣裳や車などの裝飾に代々極つて用ひられた文樣がありましたが、それを紋所にしたのがこれであります。例へば、花

花山院家
御堂關白道長の孫、師實の二男家忠を祖とす。明治維新後、侯爵を授けらる。

今出川家
藤原氏の一支族、西園寺實兼の子兼季を祖とす。明治維新後、侯爵を授けらる。

久我家
村上天皇の皇子具平親王の子經房を祖とし、その孫雅實より久我氏を稱す。明治維新後、侯爵を授けらる。

信仰的紋章



山院家の杜若、或は今出川家の楓、久我家の龍膽の如きは、いづれも車や著物の文様として用ひられたものが、後世紋所が行はれるやうになつてから、其の方面に轉用されたものであります。是等の紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて用ひ始められたものであるから、尚美的紋章といふべきで、それは概して文様から移つて來たものでありました。

第六種は、信仰の意味から用ひられたもの、卽ち信仰的紋章ともいふべきもので、是には隨分澤

戰國時代
後土御門天皇の文明・明應より正親町天皇の元龜・天正に至る百餘年間。

中川清秀
信長に仕へし武將。天正十年（二二四二）戰死。年四十二。

アンドルューの十字架
アンドルューはキリスト十二使徒の一人。通常×字形十字架をその表號とす。

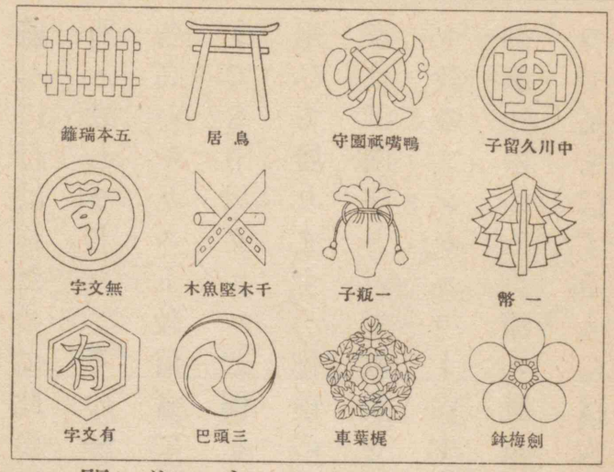
島原の亂
寛永十四年（二二九七）天草時貞を將とし肥前（長崎縣）島原に起りし亂。

山の種類があります。例へば、戰國時代にはキリスト教が盛んに行はれたので、此の教を信ずる者は、多く十字架を紋所と致しました。その一例を擧げると、中川清秀は、當時の名高いキリスト教信者でありました。それ故、その子孫は、今でも「中川クルス」と稱して、バテントークルスといふものを用ひて居ります。備前の岡山、因幡の鳥取、この兩池田侯爵家は祇園守といふ紋所を用ひて居りますが、これはキリスト教のアンドルューの十字架から出たものであります。

御承知の如く、島原の亂以來、キリスト教は嚴しい國禁となつて、是を信ずるものは、大名でも士でも、或は死刑に處せられ、或は家祿を召上げられるといふ樣なことになつて、此の

瑞籬
ミヅガキ。

教に關係のあるものは、片端からその影を潛めましたが、それにもかゝはらず、戰國時代にキリスト教を信じた大名の子孫は、大抵此の紋を用ひて居りました。



信仰的紋章の中で、神様に關係のあるものは比較的澤山あります。例へば鳥居・瑞籬・欄干・御幣・額・瓶子・千木・堅魚木など、苟も神社に關係のあるものは悉く紋所となつて居りますが、これを見てもさすがに日本は神の國だと思はれます。これに反して、佛教

仙石子爵
舊但馬(兵庫縣)出石城主。
趙州無字
社紋
天滿宮
菅原道眞を祀る。
諏訪神社
建御名方命。八坂刀賣命を祀る。
八幡宮
八幡神を祀れる神社。
出雲大社
官幣大社。大國主命を祀る。島根縣簸川郡大社町にあり。

關係の紋所は多くありませんが、これは神道の現世的なるに反して、佛教が超現世的なるに基づくのでありませう。

仙石子爵の紋所が「無」の字を用ひて居るのは、禪宗の「趙州無字」と言ふ故事から來たので、少い例の一つであります。

我々の家に紋所があるやうに、神社にも亦社紋と言つて極つた紋所を用ひてゐるのがあります。例へば、天滿宮の梅鉢の紋、諏訪神社の梶の葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の龜甲に「有」の字の紋の如きが、それであります。出雲で「有」と言ふ字を用ひるのは、社傳に據ると、出雲では、祭神の大國主命が杵築に鎭坐せられたのが十月であつたといふので、此の月を鎭坐月と申して居りますが、十月の二字を組合は

せると「有」の字になるので、それを社紋に定めたのであると申します。とにかく我が國では、家にも神社にも定つた紋章があつて、それに歴史的精神的の重大なる意義があるのでありますから、紋所の研究がその方面の關係學に取つて大切であるばかりでなく、是について一通りの知識と趣味とを持つことは、修養ある國民の一種の嗜みともいふべきでありませう。

（沼田頼輔―日本紋章學）

沼田頼輔
文學博士。考古學者。神奈川縣の人。昭和九年歿。年六十八。

國風
すなほ。
美德

一二　我が國の家庭

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて路傍に遊んでゐるのは、我が國ではどこへ行つても見受けることであるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が「何といふ可愛らしい樣子であらう。こゝに日本の美しい國風が見える。」といつて、感心したさうである。すなほに親のいひつけを守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹を可愛がつて世話するのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切にするのも、日本の家庭の特色である。この西洋人は、詳

しくは我が國の家庭の內部を知らなかつたのであらうが、路傍の子供を見て、我が家庭の美德、父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ」の一端を認めることが出來たであらう。

父母の子を愛する情は、東西共に變りはないが、我が國の家庭では殊に子供を大切にする。家の貧富貴賤によつて、生活の上にはそれ〴〵の差別があるにしても、一體の風習は子供を大切にする。子供は父母の寶といふばかりでなく、家の寶

母と子　藤彥衞門筆

七夜
子女の生れてより七日目にあたる夜。この夜祝儀を行ふ。

產土神

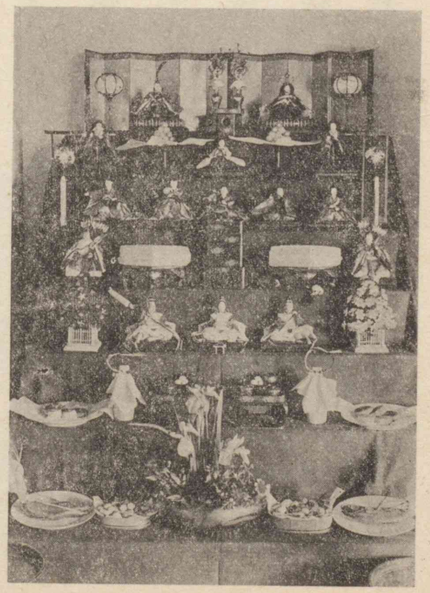
七五三の祝
男兒は三歲と五歲、女兒は三歲と七歲とに當る年の十一月十五日に行ふ祝儀。

袴著
ハカマギ。男兒の始めて袴を著る儀式。

として尊重される。子が生れた時の父母の心は、家の後繼が出來たのを喜び、家のます〴〵繁昌してゆくのを祝ふのである。親族も朋友も皆同じ心で祝賀するのである。七夜までのうちに名をつける。「行末は立派な人になつて、御國のためにもなれ。」と、祖先の名に因んだり、めでたい語などを選んだりして命名する。三十二三日目には產土神にお宮參りをして、誕生したことをお知らせする。三つ、五つ、七つとだん〴〵生長すれば、七五三の祝といつて、その年々の十一月にお宮に參詣する風習もある。男の子の袴著の祝、女の子の帶の祝、父母はひたすらその子の成長を樂しむのである。

端午（タンゴ。）

三月三日の雛祭は女の子の節句、五月五日の端午は男の子の節句、一家中の歡喜は子供たちのために傾けられる。美しい雛人形、勇しい鯉幟、かういふ樂しい日は年々に繰返されるのである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供たちを喜ばせようと苦心し、親類・知友からも、お子様へと心をこめた品物を贈る。我が國の都市ほど玩具屋の多い所はないといふのも、小さい國民を可愛がる國風の盛んなことを證明する



雛祭

位牌

ものである。

我が國の家庭には、お父さんも、お母さんも、お祖父さんも、お祖母さんもいらつしやる。日本の子供は、父母の慈愛の外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は、孫をいつくしんで老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌を祀つてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んでゐて、だん〳〵と子孫に傳はつてゆくのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さういふもののないところもあるが、本家にさかのぼり、源を正せば、皆それがある。家には家の紋もある。

ちゝはゝは我がいへの神わが神とこゝろつくして
いつけ人の子

と本居宣長大人は歌はれた。父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神とあがめるのが、我が國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しい懷かしい親愛の情に、貴い有難い敬愛の情が涌いて、父母に對しては神に對するやうなつゝましやかな心持になるのである。それゆゑ、言語動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では、親子・夫婦・兄弟・姉妹の間の言葉遣ひはすべて對等であるが、「家の神」と仕へまつる父母に對しての言語は、もとより別でなければならぬ。先祖と同居してゐる我が國の家庭では、目上に對する言語と、目下に對する言語とに明かな差別がある。親代りに世話をし、いたはつて下さる兄姉に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄姉は飽くまで幼少な弟妹を憐み、弟妹はどこまでも兄姉を目上の人とあがめ、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、こゝに美しい家庭が成立つのである。「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和」する家庭が存立するのである。西洋人は、「日本は子供の樂園である。」といつてゐる。「日本は子供を可愛がる國である。」と西洋の讀本にも書いてある。我等がこの國に生れたのは、我等の幸である。

（芳賀矢一――日本人）

大人 ウシ。師又は學者の尊稱。

いたはつて

樂園 ラクエン。

芳賀矢一 文學博士。國文學者。元國學院大學學長。福井縣の人。昭和二年歿。年六十一。

野口英世
醫學博士。理學博士。帝國學士院會員。ロックフェラー研究所部長。福島縣の人。昭和三年歿。年五十三。
人道

アクラ
西アフリカ英領アシャンテの要港。

一三　野口英世の生家

「人命を奪ふ微細な病菌發見のため倦むところなき努力を續け、國境と人種とを超越して人道のために鬪つて一生を終つた野口英世博士の努力は、何をおいても世界の感謝を要求する資格がある。」これは野口博士を哀惜した或外國新聞の社説の一節である。一九二八年五月二十一日、西亞弗利加アクラ海邊に悲壯な死を遂げた野口博士に對し、世界の國といふ國の隅々から嵐の

野口英世

猪苗代湖畔の一寒村
福島縣耶麻郡翁島村。
赤貧洗ふが如く

若松
若松市。福島縣會津盆地の東南隅にあり。

挽回
バンクワイ。

如き哀悼痛惜の聲が起つた。

野口博士は、福島縣猪苗代湖畔の一寒村に生れ、幼名を清作と言つた。祖父の代からあまり富裕でなかつた家計は、親の代となつては全く赤貧洗ふが如く、父は村の郵便局の脚夫などをして僅かの手當を受け、母も亦、今日の便利屋といふ風な仕事に從事し、村人の御用聽きをして、毎日村から若松に往復十餘里の道を通ひ、買物や傳言を果すことによつて些細な賃金を得てゐた。やがて賢母とよばれ、女傑と謳はれただけあつて、男優りの母は、この苦難に堪へて、家運の挽回と子供の養育に死物狂ひの努力をした。博士の成功の陰には、第一にこの母の存在を忘れることは出來ない。

檜舞臺

夢寐　ムビ。ゆめのま。

招聘

後年世界に名を成した博士が、華やかな學界の檜舞臺にあつても、夢寐にも母のことを忘れなかつたと述懐してゐる。又研究のためにはいかなる招聘にも應ぜず、歸朝をさへ肯んじなかつた博士が、大正四年母の健康勝れずとの報に接するや、飛ぶやうに米國から歸つて來た如きは、博士の母に對する心情を物語つて餘りあるであらう。

博士の生家といはれる家には、現在は人が住んでゐない。間口八間に奥行五間程の家で、萱葺、荒壁、藁葦、そして採光窓の尠い陰氣な構造、勝手座敷らしいのが二つ、あとは廣い土間と隣り合はせの馬小屋といつた風の設計で、農家としても餘りに簡素すぎる古いバラックである。屋根に、壁に、柱

慘澹　サンタン。

形容詞

に、修理の跡が、過ぎ去つた貧困の跡を刻んで慘澹として殘つてゐる。博士の少年時代に、寢ながらにして星と語り、月を仰ぐ夜があつたと共に、漏るといふよりも降るといつた方が適切な形容詞であるのに、泣かなければならないやうな雨の日、雪の夜が續いたといはれる。その萱葺屋根には秋草が成長してゐた。

野口英世の生家

朽廢
破屋
超人爲的
景仰　ケイギヤウ。したひあふぐ。
低徊　テイクワイ。
橘　輝政　著述家。新聞記者。福島縣の人。明治三十年生。

一巡、二巡、私は朽廢した家の周圍を丹念に巡り歩いた。この破屋から世界學界の王座へ昇り、貧童より身を起して世界的細菌學者に成つたことは、何とその努力と困苦の超人爲的であることか。この破屋こそは金殿をも凌ぎ、玉樓にも代へ難い貴重なものでなければならない。雨漏らば漏る程、壁落ちなば落ちる程、柱朽ちなば朽ちる程、愈崇嚴の氣人に迫り、感激と景仰の念は涙と共に涌き來り低徊去るに忍び難いものがあつた。

（橘　輝政―野口英世博士傳）

一四　實業の精神

實業に最も大切なものは、其の精神である。然るに、我が國に於ては、永い間實業と道德とは一致しないもののやうに誤解されてゐた。昔の諺にも「商人と屏風とは曲らねば立たぬ。」と言はれて居るくらゐで、商人は曲つた事をしないと立行かぬもののやうに一般に誤り考へられてゐた時代もあり、今日でもまだ此の思想が殘つて居る。

併しながら、是ほど間違つた考はない。私は、實業の眞の成功不成功は、全然其の人の道德心の强弱に因ると思ふ。吾々が實業界の成功者を見ると、往々正直や眞面目では成

マニラ　フィリッピン群島。フィリッピン共和國の首府。ルソン島にあり。

懲罰解雇　チョウバツカイコ。

功するものでないと思はせられることが無いでもないが、靜かに人生の成行を考へて見ると、眞の成功は強い道德心の基礎の上に立つてこそ始めて之を認める事が出來るのであつて、一時の僥倖や又は世の公益を害するやうな手段に依つて得た成功は、浮雲のやうなものである事が分る。嘗てマニラの富闘に當つて巨利を得、驕奢を極めて一時は富闘大盡とまで謳はれた者もあつたが、今日は消えて其の跡形もない。近くは勸業債券の闘に當つて身を持崩し、終には其の雇主から懲罰解雇に附せられた若者もある。況んや他に不利を及ぼして己を利しようとするやうな手段方法で成功を望んでは、如何に奸智に長けて居つて、一時世

因果はめぐる小車

僥倖　ゲウカウ。思はざる仕合せを得るをいふ。

人の目に成功者のやうに見えても、因果はめぐる小車のやうに、自分一代の間でも不義の富に一身一家を苦しめ、却つて貧しい人々の境遇を羨むやうになるのは必定である。富む爲に一時の僥倖を期するのはまだしも、手段方法を擇まず、公益を害することをも厭はぬ致富の術によつて成功しようとするやうなのは、最も愼むべきことである。苟も實業に從事する者は、正直で眞面目である事が、昔の武士の精神のやうであらねばならぬ。

西洋でも、古い諺には、子に向つて言ふ父の言葉として、「お前はなるたけ正直に金を作れ。いや、正直は第二として、先づ金を作れ。」と言ふやうなのもあり、又或時代には、實業の中

でも商賣をする人々の間には、道德を無視するやうな行爲が惡いと認められなかつた事もあるが、今日ではさういふ考は全く一般に容れられぬやうになつた。

我が國に於ける實業道德は、昔と今とを比較すると、昔の方が高かつた。商業に就いて之を見ても、昔の町人の方が今日の商人よりも遙かに律義であつた。併しながら、今日の商人に實業道德の觀念が薄いのも、商人の罪ばかりではない。明治維新の改革によつて解放された町人は、權利を與へられたが、義務を敎へられなかつた。其の上、今日色々の新思想が輸入されるやうに、以前アメリカなどで流行した拜金思想が盛に輸入されて、其の實業に對する誤つた思

武藤山治 實業家。岐阜縣の人。昭和九年歿。年六十八。

想が、本家本元のアメリカでは疾くの昔に流行しなくなつた今日まで、我が國の商工業者の間に依然として殘つて居るのである。今日我が國に於て、個人の品性の低いのも、政治・經濟の行詰りを來したのも、國民思想の動搖を來したのも、皆其の元を尋ねると、實業の眞の精神が我が國民の間に理解されて居らぬ爲である。私は今後是非とも此の大切な實業の精神を明かにしたいと切望して居る。

（武藤山治―實業讀本）

櫟　クヌギ。ぶな科に屬する落葉喬木。

鬼怒川　栃木縣の中部及び茨城縣の西部を流れ利根川に入る。

隱見　見えたり隱れたりする。

欅　ケヤキ。にれ科に屬する落葉喬木。

一五　小春の田園

長塚節

小春の日光は岡の畑一杯に射しかけて居る。岡は田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれて、村から村へ通ふ街道へ下りる。田は岡に沿うて狹く連つて居る。田圃を越して竹藪交りの村の林が、田に沿うて延びて居る。竹藪の間から草家がぽつ〳〵と隱見する。帚草を中途から切離したやうに枝を擴げた欅の木が、其處にも此處にもすく

掛稻　刈りて束ねて逆さに竹に掛けたる稻。

高瀨舟　淺瀨をも通過し得るやうに、舟底を淺く平らに造りたる舟。

蹙る　チヂマる。

筑波山　茨城縣筑波・新治・眞壁三郡にまたがる山。

すくと突立つて居る。

田にはもう掛稻は稀で、稻を掛けた竹が、まだ外されずに寂しげに立つて居る。鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つて居るので、近くの水はその陰に隱れて見えぬ。上る白帆は、葉末に半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越えて、水がしら〳〵と見える邊は、もう遙かの上流である。だから、篠の葉末を離れて高瀨舟の全形が見える頃は、白帆は遙かに小さく蹙つて居る。土手の篠の上には對岸の松林が連つて見える。更に其の上には、筑波山が一脚を張つて、他の一脚を上流まで延ばして聳えて居る。小春の筑波山は、常磐木の部分を除いては赭く焦げたやうである。其の

赭い頂上に點を打つたやうに、觀測所の建物がぽつちりと白く見える。稍不透明な空氣は、なほ針の尖でつゝくやうに、其の白い一點を際立つて眼に映ぜしめる。櫟の林は、此の狹く連つてゐる田と鬼怒川との間をつないで、横に續いて居る。田も遙かのさきは櫟林に隱れて、鬼怒川も上流はいつか櫟林に見えなくなる。櫟の木はびつしりと赭い葉がくつついて居る。

岡の畑は向うへ幾らか傾斜をなして居るので、中央に立つて見ると、櫟の林は半ば隱れて低い土手のやうに連つて見える。林の上には兩毛の山々が雪を戴いて、それがぼんやりと白く見える。

兩毛　上野・下野の兩國をいふ。

こんな周圍を有して、岡の畑は朗かに晴れて居るのである。土は乾き切つて居る。既に二三寸に延びた麥は、岡一杯に薄く綠青を塗つたやうである。

其處にも此處にも百姓が小さく動いて居る。麥畑をうなつて居るものもあるが、大抵は芋掘の人々である。四五人の手で芋を掘つて居る畑の縁には、馬が茶の木に繫いであつて、俵が轉つて居る。此の俵があれば、遠くからでも芋掘の人々であることがわかる。

馬は退屈まぎれに、どうかすると茶の木をむしることがある。其の時、一人が駈けて來て、轡をがちんと一つ極めつけて叱り飛ばせば、またおとなしくなつて、ばさり〳〵と尾

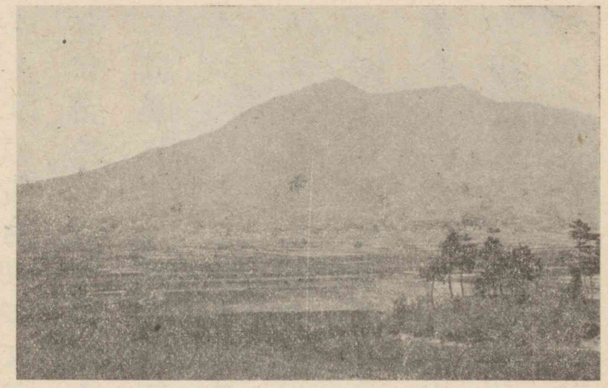
綠青　ロクシャウ。

うなふ　耕すに同じ。

轡　クツワ。

忽然

を動かして居るのである。



筑波山

百姓の手元は忙しい。しかし岡は唯長閑なさまである。日は稍傾いた。忽然筑波山の絶頂から眩しい光がきら〳〵と射して來た。毎日同一の時刻に、此の光は此の岡へ強く射し掛けて來るのである。百姓の或者は、筑波山で火を燃やすのだらうなどといつてをる。然しそれは觀測所のガラス窓が日光に反射するのである。岡の畑に變化が起

つたとすれば、數時間にたゞこれだけである。ガラス窓の反射は、やがて消えてしまつた。芋掘の人々は勿論此の光は知らなかつた。

街道へ下り口の小さな畑でも、一組芋を掘つて居る。隣の桑畑は葉が大抵落ちて、其の芋畑へも散らばつて居る。青いよわ〳〵した小麥が生え出して居る。小麥は芋の間に二畝づつ作られてある。芋の莖はぐつたりと茹でたやうである。女は芋の莖を菜刀で元から切つて先へ出る。後から男が鍬の先で芋の株を掘起す。ぴか〳〵と光る鍬の先を、ざくつと芋の株へ斜に突立ててぐつと鍬を持ちあげると、大きな土の塊りがふわりと浮きあがる。鍬をそつ

菜刀
ナガタナ。庖丁。

と拔いて先の株へ移る。小麥へ障らぬやうに、極めて丁寧に掘つては先へ〳〵と行く。女は莖を切り終ると、後へ戻つて、掘つてある大きな土の塊りを兩手で二尺計り揚げてどさりと打ちつける。細かな土がほぐれて、こゞつた子芋の塊りから白い毛のやうな根がぞろつと現れる。それから芋と芋とを兩手の掌でぶり〳〵と離して、やがて俵を立てて入れる。さうして穴を手先でならして先の塊りをほぐす。乾いた畑に、濕つた丸い穴の跡が、一つづつ殖えて行く。日光が其の土を後から後からと細やかに乾かして行く。

ならす

殖えて

棚引く

短い日は、村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に眞

晩稻 おそく熟する稻。

殘曛 ザンクン。夕日のこと。

頰白 ホホジロ。燕雀類に屬する鳥。

倒樣に落ちかゝる。横にさす光は、麥の葉をかすつて赭い櫟の林が、一しきり輝いた。林の縁の茶の木の花は、白々と光を帶びて居る。筑波山は見る〳〵濃い紫に染つて來た。秋の末の晩稻を刈る頃から、夕日のさし加減で、筑波山は形容し難い美しい紫を染出す。百姓に聞いて見れば、嘗てそんな筑波山は知らぬといふ。知らぬといふのは尤ものことである。日が落ちて、殘曛がなほ明かな數十分間は、彼等の仕事が最も捗る時である。

晩餐の仕度をするために、女等は今何處の畑からも、一人づつ立つて行く。女等が去つてから、百姓の手元が漸く薄暗くなる。頰白が寂しさうに桑の枝を飛びめぐる。百姓

鳴　シギ。涉禽類に屬する鳥。

長塚　節、歌人。小說家。茨城縣の人。大正四年歿。年三十七。

はそんな事には頓著なしに、せつせと芋を俵へ詰めて居る。

村の竹藪から昇つた青い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに、幾筋も棚引いて、田圃から岡まで居かうとして居る。其の時、黃昏の中を、百姓は田圃から相前後して歸つて來る。何處ともなく鳴がきゝと鳴いて去つた。百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は田圃から畑から、さうして次第に天地の間を掩うた。

（長塚　節―長塚節全集）

なきかはす二つの蛙一つ止み一つ又やみぬ我も眠くなりぬ

榛の木の花さきしかば土ごもり蛙は鳴くもあたゝかき日は

洗ひ米かわきて白きさ筵にひそかに樓閣の花こぼれ居り（長塚　節）

信濃　シナノ。長野縣。

八が嶽　長野・山梨兩縣の境にあり。

立科山　長野縣にあり。

霧が峰　長野縣にあり。

諏訪湖　長野縣の中部にあり。

私の村落　下諏訪町字高木。諏訪湖の北岸にあり。

一六　故郷の冬

富士火山脈が、信濃に入つて八が嶽となり、立科山となり、霧が峰となり、その末端が大小の丘陵となつて諏訪湖へ落ちる。その傾斜の最も低い所に私の村落がある。傾斜地であるから、家々石垣を築き、纔かに地をならして宅地とする。最高處の家は丘陵の上にあり、最低處の家は湖水に沿ひ、その間の傾斜面に百戸足らずの民家が散在してゐる。

山から丘陵、丘陵から村落へ續く木立が、皆落葉樹であるから、冬に入ると傾斜の全面が皆あらはになつて、湖水から反射する夕日の光がこの村落を明るくする。

髭 ヒゲ。
睫毛 マツゲ。

寒さが追ひ〳〵に加はつて、十二月の末になると、湖水が全く氷結する。湖水といつても、海面から二千五百尺の高處にあり、村落はその湖水よりもなほ高い丘上にあるのであるから、嚴冬の寒さは非常である。朝、戸外に出れば、髭の凍るのは勿論であるが、時によると、上下の睫毛の凍著を覺えることすらある。かやうな時は、顏の皮膚面に、響き且裂けるが如き寒さを感ずる。

この頃、私の村では、毎朝未明から、かあん〳〵といふ響が湖水面から聞えて來る。これは人々が氷の上に出て、「たゝき」といふ漁をするのである。長柄の木槌で氷を叩きながら、十數人の男が一列横隊を作つて向うへ進む。槌の響で

俯目
視線
視覺

湖底の魚が前方へ逃げるのを、だん〳〵追ひつめて、豫め張つてある網にかゝらせるのが「たたき」の漁法である。

諏訪湖氷上の漁獲

私の家は村の最高處にあり、庭下の坂がすぐ湖水に落ちてゐるので、一列の人々を見るには、かなり俯目にならねばならぬ。俯目になつて視線が氷上の人まで達する距離はかなりあるのであるが、氷上の人の槌を揮ふ手つきまで明瞭に見える。氷を打つ槌の先が視覺に達する時、槌の

聽覺

交錯（カウサク。いりまじる。）

作業

音はまだ聽覺に達しない。次の槌を振上げる頃に、漸く前の槌の音が聞える。それで槌の運動と音とが交錯して、目と耳とに來るのである。目に來るものも、耳に來るものも、微かに徹して明瞭である。單にそればかりではない。一列の人々の話聲までも、手に取るやうに聞える。空氣が澄んでゐる上に、村が極めて閑靜だからである。

氷切の作業は、快晴の夜を選んで行はれる。溫度が低下

氷切

硬度

かつちき

半纏（ハンテン。）

して氷の硬度が增すからである。これは若者でなくては、到底堪へられぬ勞作である。若者は宵の口から藁製の雪沓を穿き、その下に「かつちき」をつけて、湖上へ出かける。綿入を何枚も重ねた上に、厚い半纏を纏ふので、體は所謂著ぶくれになつて、横も竪も同じに見えるといふ姿である。かやうな扮裝をした若者が、氷の上に一列に竝んで、氷を鋸びきにひき始める。

氷をひく手元は、初め暗くて後に明るい。氷に眼が馴れるのである。三四尺ほどの大きさにひき離される氷の各片が、切離されると共に水中に陷る。それが氷鋏といふ大きな鋏で挾み上げられる。挾み上げられた後の水には星

平坦

龜裂（キレツ。）

越えて

防寒手段

が映つて搖れてゐる。大凡一望平坦な氷原にあつて、空は手の屆くやうな低さを感ずる。星が降る如く光り滿ちてゐるのである。星の光は、水にあつて水の明りとなり、氷にあつて氷の明りとなり、その明りに全く馴れるに及んで、相隣する人の顏まで明瞭に見えるやうになる。夜が漸く更けて寒さが益〻加はると、氷原の諸處に龜裂の音が起る。寒さの爲に氷が收縮するのである。それが氷原を越えて四圍の陸地・山地にまで響き渡る。その響の下に立つて、鋸をひいてゐる若者の背中には汗が流れ、暫く立つて休息してゐると、その汗が背に凍り著くのを覺える。さういふ時には、鋸の手を休めないやうにするのが、唯一の防寒手段にな

連夜

るのである。それ故若者はたゞせつせと切る。腕が疲れると唄も出ない。たゞ時々睡氣ざましに大きな聲を張上げるものもあるが、それも永くは續かない。餘り疲れて寒くなれば、氷の上で焚火をすることもある。かやうにして夜が白んで來ると、積まれた氷板が山の如くかさなり、それが夜明から運んで、湖岸の田圃に積上げられるので、田圃には連夜切上げられた氷板が、長い〳〵距離に亙つて正しく積並べられて、覆がなくとも白晝の日光で溶けるやうなことはない。海拔二千五百尺の地のいかに寒いかは、これで想像し得られるであらう。

私の村は、また夜になると、ところ〴〵の家から藁を打つ

草鞋 ワラヂ。

槌の響が聞える。氷切などに行かぬ人々が、草鞋や雪沓を造るのである。ひつそりとした夜の村に響く槌の音は、鈍くて底のない響であり、聞いてゐればゐるほど、もの遠い感じがする。氷叩きの槌の音は、遠くて近く聞える。藁を打つ槌の音は、近くて遠い感じがする。響くところは相反するけれども、靜寂に歸するに於て一である。

（島木赤彦―赤彦全集）

靜寂に歸す

島木赤彦 本名久保田俊彦。歌人。長野縣の人。大正十五年歿。年五十一。

まかゞやく夕燒空の下にしてこほらむとする湖のしづけさ

みづうみの氷に立てる人の聲坂の上まで響きて聞ゆ

みづうみの氷はとけてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

（島木赤彦）

一七 雪

雪はふる！　雪はふる！

見よかし、天の祭なり！

空なる神の殿堂に

冬の祭ぞ酣なる！

たえまなく雪はふる

をどれかし、鵜等よ！

うたへかし、鵠等！
ふる雪の白さの中にて！

いと聖く雪はふる、
沈默の中に散る花瓣。
雪はしとやかに
踊りつゝ地上に來る。
雪はふる！　雪はふる！
白き翼の聖天使。

堀口大學
詩人。東京市の人。明治二十五年生。

吾等が庭に身のまはりに
さゝやき歌ひ雪はふる！

ふり來るは惠の麵麭なり！
小さく白き雪の足！

地上にも屋根の上にも
いと白く雪はふる。

冬の花瓣の雪はふる。
地上の子等の祭なり！

（堀口大學）

小夜の中山　靜岡縣小笠郡の金谷峠と日坂峠との間にある山。
島田　靜岡縣志太郡島田町。
大井川　源を赤石山脈に發し、駿河灣に注ぐ。
金谷の宿　今の榛原郡金谷町。

一八　小夜の中山

暑い日であつた。島田から大井川を舟で渡つた。舟はふくれ上る波の頭を輕く撫でて越えた。

金谷の宿を汗を吹き〳〵上りつめると、右に白い新道が走つてゐる。そして山裾に消えてゐる。私達は舊道に從つて山へ登つて行つた。二三町行つて休みたくなつた時、舊道から突き出たところに見はらし場が見えた。蟬がそこだけに鳴

昔の大井川　廣重筆

無盡藏　ムジンザウ。
牧野が原　靜岡縣榛原郡と城東郡とに跨る一帶の高地。
尾根　ヲネ。峰のこと。
菊川　同郡金谷町大字菊川。
目隱し　メカクし。

いてゐて、木蔭には二三人蓆を敷いて人足が寢てゐた。その傍を通つて私は小さな祠の冷たい石段に腰を下した。風の通らぬ山道だつたが、此處は無盡藏に風が吹いて來る。

山を登り越えると牧野が原であつた。牧野が原の尾根を間も無く折れて菊川へ下つて行つた。「宿の名を問ひ給ふに菊川と申すなりと答へければ」云々から始まつて、俊基朝臣の感慨を太平記に述べてあるところである。私達はその菊川を知らずに、菊川の橋の上で里の人に小夜の中山へ行く道を訪ねた。

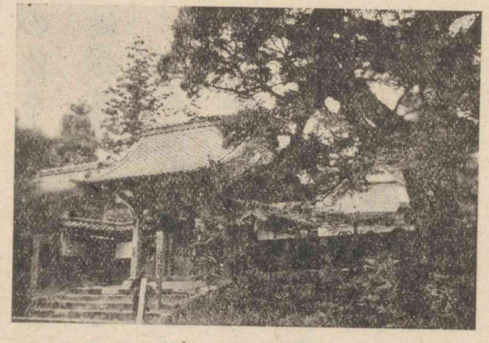
煙草の畠の所から、濕つた石ころ道を又登り出した。見はらしも何もない只急な坂道であつた。私は目隱しをさ

喘ぐ　アヘぐ。
古風

れた馬車馬のやうに喘いで行つた。

登りつくと古風な茶店が見えた。

店先で老婆と娘とが笹に飴を包んでゐた。これが小夜の中山名物の飴であつた。


久延寺

私達は箸の先につけて貰つた飴をなめ乍ら、舊道の端につま立つて牧野が原を一望の中に眺めた。富士が見えるので此の茶店を富士見亭と云ふさうだ。昔は隣に東海道一の鍛冶屋の屋敷があつたさうだ。茶店の裏で黒い馬を男が盥で洗つてゐた。

夜啼石　ヨナキイシ。昔夜間啼聲を發したりと傳ふる石。
久延寺　クエンジ。夜啼石に因める子育觀音を祀れり。
廣重　安藤氏。江戸末期の浮世繪師。安政五年歿。年六十二。（二四五七―二五一八）
本陣　江戸時代に、諸大名の勤番交替の往來に、その宿泊所となせし旅館
日坂の町　小笠郡日坂村。
家竝　ヤナミ。竝びたる家々。
百足　ムカデ。多足類に屬する節足動物。

「日の暮れないうちに行きましよう。」

夜啼石は久延寺の前にあつた。廣重の繪では坂の中途にあるやうに覺えてゐたが、博覽會へ出したり何かしてゐるうちに處が變つたのかも知れない。本陣の昔を忍ばせる庭を左に見て急ぎ出した。小夜の中山の馬のたて髪のやうな尾根は下る一方だつた。下りつめたところの松の木の間から日坂の町が見えた。日坂の町は、後に傾いた美しい山を背負つて、その下を白く光つた川が流れてゐた。その川を過つて、家竝が百足のやうに山裾をめぐ

夜啼石

つてゐた。

日はまだ高かつた。私達は此の景色に見とれて幾枚もスケッチをとつたけれども、立ち去りかねた。

「秋になつたら來よう。」

「秋になつたら來よう。」

二人は云ひ合はせた。

云ひ合はせた通りに、二人は十一月初めになつて、日坂の町へ滯在する豫定で油繪の道具を持つて來た。樂しみにしてゐた松の木の所へ行つてみると、秋の日は既に移つてゐた。山は一日中、逆光で黑くなつてゐた。私達は景色を別に又探さなければならなかつた。

逆光 ギヤककワウ。逆光線に同じ。

宿をとる

眩しい マブしい。

中風 チユウブ、

世話する人があつて、東海道の松並木に沿つて白壁の塀をめぐらした寺に宿をとつた。寺の離れの新しい障子を開けると池があつた。そして夜になると鯉のとぶ音がきこえた。

無 同 山

私達は二十町ばかり山の中へはいつた村落で山を描きはじめた。毎朝、眩しい街道を、初冬の山を見乍ら通つた。しかし山は一向紅葉がはつきりして來なかつた。私達の仕事もなか〳〵進まなかつた。中風の住職は一體何處を

粟ん岳　粟が嶽といふ。小笠郡倉眞村の東北にある山。
札所　フダショ。
木枯
緋鯉　ヒゴヒ。

描いてゐるのかと不思議さうにきいた。私達の答をきいてそれは粟ん岳さんだと云つた。本當の名は無間山である。そして粟ん岳の頂上には御札所の寺があつて、私の弟子が行つてゐると云つた。

木枯が吹くやうになつた。池の緋鯉にも。木枯は夜にきくと小夜の中山の尾根を傳はつて落ちて來る。その音がきこえなくなつて、暫くしてから私達の室の板戸にぶつかる。

木枯は廊下の古い押戸を押して本堂の方へ通り拔ける。私達の仕事は十二月になつてしまつた。寺の食事は思ひきつて粗食で、私達は痩せた髭面を竝べて、いつになつたら

倉眞　小笠郡倉眞村。
掛川　同郡掛川町。

歸れるだらうと愚痴を云つた。

木枯の吹かない晩、ひとり目覺めてゐる私の枕に、小夜の中山の下のトンネルを通る上り汽車の響がきこえて來た。しかし朝になつて鴉の啼聲が高空にきこえ、室の外が晴れてゐるのを感じると元氣が出た。

ある日、あまり風が吹いて畫架が立てられない時に、粟ん岳へ登る氣になつた。粟ん岳は牧野が原の半圓周を從へ、冬空の中にふん張つて駿河・遠江を見おろしてゐた。

粟ん岳の禿げた頂上に、少しばかり森があつて、寺があつた。私達は此の山の裏を傳つて倉眞へ出、掛川へ出るつもりだつた。

豪奢　ガウシヤ。おごりてはでやかなること。
贅澤　ゼイタク。
師走　シハス。

中川一政　洋畫家。石川縣の人。明治二十六年生。

裏へまはつて私達はこんなに驚いた事はない。

綠の金、紫の金、黃色い金、黑い金。あらゆる金色の厚い掛布を引被つた山が、山脈を爲して寢てゐるではないか。自然とは何と豪奢な贅澤をするものだらう。しかも人も知らない師走の山の裏で、何年何月何日それを見たのはたゞ二人の旅人だけである。

私は東海道を上り下りする時、いつも汽車の窓から首を出して粟ん岳を探す。

粟ん岳は、似たやうな幾つかの山の中に動いてゐる。粟ん岳も私をなつかしがるやうだ。

（中川一政―武藏野日記）

寬永寺　東叡山圓頓院。天台宗。關東の總本山。東京市上野公園內にあり。
母人　ハハビト。母に同じ。
父　正濟。
めではやす

一九　わが幼時

わが幼き頃、上野物語といふ草紙ありけり。これは寬永寺の花見に、人の群れ來る事どもを記せしなり。わが三歲なりし春の頃にやあるべき、火燵に足をさして、腹這ひ居て、その草紙を見ながら、筆紙を求めて透寫しけるを、母人の見給ひ、十が中一二は、まことの文字もありければ、わが父に見せまゐらせしを、父の友人の來り見しより人々も聞傳へて、その寫せし物どもを取傳へて、めではやしたりき。

その後は、常の戲れに、筆執りて物書く事のみをしければ、おのづから日々に文字をも見知りたれど、物讀む師友とす

往來物　書翰の案文を集め記したる書。
戸部　民部省の唐名。
上總の國久留里藩主土屋利直を官名によつて呼びしもの。
加賀　石川縣の一部をなす。
太平記評判　五十卷。和田助則の作。太平記中の兵事を評論したる書。
奇特
七言絶句

べき人なかりしかば、只往來物の類などを讀み習ふのみなりき。戸部の家人に富田とて、生國は加賀の國の人と聞えしが、太平記評判といふ書を傳へて、その事を講ずるあり。夜々にわが父など寄合ひつゝ、その書を講ぜしめらる。わが四五歳の時、常にその座に侍りけるに、夜いたく更けぬれど、終に座を去りしことなく、講畢りぬれば、その義を請問ふことなどもありしを、人々「奇特のことなり。」と言ひあへりき。

六歳の夏の頃、上松といふ人の、少しは文字などありしが、七言絶句の詩三首教へて、其の意を解き聞かせしに、やがて誦を成して、人にも講じ聞かせたりき。「この兒、才あり。いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。」など、かの人も言ひし

頑なる　カタクナなる。
利根こそ生れつきたらめ。
叶ふべからず
上總　カヅサ。千葉縣の一部。

かど、頑なる昔人たちの言ひしは、「昔より『利根・氣根・黄金の三こん無くては、學匠にはなり難し。』といふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くしてその氣根の程も測り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事も心得られず。」など言ひ合へりしに、わが父も、「戸部の御いつくしみによりて、常に御側を離れまゐらせず、學に入れ師に從はしめむ事も叶ふべからず。されど、彼の幼きより物書く事をば、戸部も人々に語り誇らせ給ひし事なれば、せめては、物をば書き習はしめたくこそ侍れ。」とて、わが八歳の秋、戸部の上總の國に往き給ひし後に、手習ふことを教へられけり。

その冬の十二月に、戸部歸り給ひければ、常に傍に侍ふこ

行草　行書と草書。

堪へ難し

と舊の如く、明年の秋、また國に往き給ひし後にて、課を立てられて、「日の中には行草の字三千字、夜に入りて一千字を限りて書出すべし。」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて課いまだ滿たざるに日暮れむとすること度々にて、西向きなる竹縁の上に机を持出でて、書終へぬることもありき。また夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられたる者と窃かにはかりて、水二桶づつかの竹縁に汲み置かせて、いたく睡の催しぬれば、衣ぬぎ捨てて、まづ一桶の水をかぶりて習ふに、始めはその冷やかなるに目覺むる心地すれど、しばし程經ぬれば、身暖かになりて、またまた眠くなりぬれば、また水をかぶること前の如くして、二た

大やう

庭訓往來　玄惠法師の作と傳へらる。十二箇月往復の書簡なり。

び水をかぶりぬる程には、大やうは課をも充て得たりき。これわが九歳の秋冬の間のことなり。

この頃よりは、わが父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、「十日の内に淨書して參らすべし。」と命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、册になして戸部に見せ參らす。褒め給ふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふほどの文ども、大方は我に命ぜられき。

又十一歳の時に、わが父の友なる關某の子は、太刀打の技に勝れて、人に教ふることありしを、我にもこの技教へられ

わぬし　おまへ。

得たりしにぞ…　笑ひたりける。

新井白石　名は君美、儒者。政治家。享保十年歿。年六十九。（一六五七―一七二五）

折焚く柴の記　三卷。白石の自傳。

むことを望むに、「わぬし、いまだ幼し。これ等の技學ばむこと早かり。」といふ。「さこそは侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらむには、刀・脇差腰にせむこと、誠に不用のことにや。」と言ひしかば、「のたまふところ實にことわりなり。」とて、一つの技を傳へて習はしめられたり。かゝりし程に、その年十六になれる者の、我と技を試みむといひしかば、木刀を取りて三度まで勝つことを得たりしにぞ、人々もまた興に入りて笑ひたりける。その後は、常にかゝる武藝の事どもを好みて、手習ふ事など心にも染めずありしかど、物讀むことをも好みければ、わが國の物語・草紙などの類は、見ずといふものなかりき。

（新井白石―折焚く柴の記）

二〇　非常時の用意

女學校に通つてゐる長女の國語讀本に目を通してゆくと、「西郷隆盛の度量」といふ題で、江戸城受け渡しの時の、勝海舟と西郷隆盛との、豪膽にして至誠の籠つた談判の運びを記した一文が載せてあつた。其の話が私をいたく感激させた。これは氷川清話といふ書物のなかから拔いたものである事が記してあつたので、私は氷川清話といふ本を見たいものだといふ心を起した。それから心がけてゐると、思ひもかけずそれは私の舅が愛讀した書とあつて、其の古い文庫のなかに藏されてゐる事を知り、早速取出して讀ん

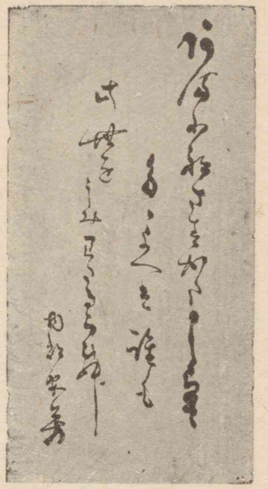
ぶつきらぼう
あま小船さすかたしらすたゝよへは誰も此世をうみわたるらむ　物部安房

天保の飢饉
天保七年（一八三九六）諸國に飢饉あり、翌年に及ぶ。

拂曉

でみると、なか〳〵面白い。おかげで私は、梅雨の鬱陶しい曇り日の二日を、熱中してすごす事が出來た。

此の書は、海舟大人の談話を選拔して纏めたもので、全文が談話風に書かれてある。言葉がぶつきらぼうで、處處多少いや味に思へる處もあるが、又實に面白く、かつ豐かに心に殘るものがある。私は其のなかでも、特に天保の飢饉の時の話を、いたく感心して讀んだのである。



勝海舟筆

天保の大飢饉の時、海舟は、毎朝拂曉に起きて、劍術の稽古に行くのに、德利搗きといふことをやつてゐる。是は德利

の中へ玄米五合ばかり入れて、其の口へはひる程に削つた樫の棒でこつ〳〵と搗くのである。海舟はそれを毎朝手にまめの出來る程搗いて是を篩でおろし、自ら炊いて父母に供して稽古に出かけた。私たちは、大正十二年の大震災の時、玄米を食へなければならない時に當つて、電氣仕掛の精米所をのみあてにしてゐた日常生活の不徹底を悟らせられ、水車の必要を新に考へたものである。然し此の德利搗きを知つてゐたら、一層私たちはおそろしい破壞の來た時の用にたち、生活の覺悟も徹底すると思ふ。然し此の事は、亂時にあつて萬止むを得ぬ時のみに限る事で、此の不自由さは海舟其の人ですら「德利搗きには己も閉口した。」と言

篩
フルヒ。

不徹底

上野廣小路　東京市下谷區。
籾　モミ。
鯛　スルメ。
黄疸　ワウダン。病名。體色黄に變ず。

つてゐるから面白い。

また當時、幕府では上野廣小路に救小屋を設けて、貧民を救助し、且淺草の米庫を開いて籾を貧民に頒けた事が書いてある。そして其の籾が最も古いものは六十年前の籾で、色が眞赤であつたと書いてあるが、かういふ點をちやんと見ておく海舟はさすがであると思つて感心した。それから赤土一升を水三升で溶いて、是を布の上に厚く敷き天日に曝し、乾いてから生麩の粉などを入れて團子を作り、又松樹の薄皮を剝いで、鯛のやうにして食物にした事、及び其の土團子をあまり食ふと黄疸のやうな顏色になるが、食へばずゐぶん食ふ事の出來るものであつたと書いてある。

フインランド　ヨーロッパ西北部にある共和國。

先年歐洲大戰の後期に於て、西歐の小さい獨立國フインランドの私の友人ミスシーリといふ婦人は、其の時政府が分配したパンを持つてゐて見せてくれた。それは森の苔と、松の鋸屑と、小量の小麥の粉とまぜたもので、とても平日口に入れる事の出來るものではなかつた。フインランドでは、一般に是を常食とした時が二箇月以上續いたと話してくれた。私たちは、平日に慣れすぎて、さういふ食料をつくる道も知らず、食べられる草さへよくは知らないのである。氷川清話の此の土團子の造りやうを、私は自分の手帖の中へ、いつの役に立つといふ事を望まぬながらに、しかと書き止めておいたのである。

（今井邦子―茜草）

一望千里

長白山系
滿洲國と朝鮮との國境にある山系。

視界

海拉爾地方
滿洲國黑龍江の西部。

二　滿蒙の天地

滿蒙といふと、多くの人が一望千里の大平原を想像する。併し、現に我が關東州租借地の如きは、遼東半島の尖端にある僅かに二百二十餘方哩の岩だらけの土地なので、海岸にだけ多少の平地があるのみである。右のやうに、奉天以南の遼東半島は、千山山脈が二重にも三重にも北から南に走り、武藏野ほどの平地さへない。しかし、奉天以北になると、遙か東に長白山系を雲か山かと認めるだけで、これこそ一望千里、一物の視界を遮るものもないのみならず、更に洮南以西の地、或は海拉爾地方、或は黑河の平原に立つと、正に天

一眸の中

揚子江
南支那にある大江。長さ約五二〇〇粁。

凍えて

荒涼

地は一眸の中にあつて、その偉大なる壯觀は、何とも形容すべき言葉もない。「揚子江の大を見ないものは、支那を知らないものだ。」といふが、それよりも「滿蒙の平原を見ないものは、大陸の何たるかを解しないものだ。」といはなければならない。

滿蒙の冬の天地は、山川草木あらゆるものが結氷する。その間が凡そ五箇月。日本では常磐の綠を誇る松柏も凍えて黃色になる。だから、滿蒙では、滿目荒涼一點の綠色を見ず、西を見ても東を眺めても、雪と氷であり、畑も五六尺の深さまで岩石の如く固くなる。ダイナマイトでないと容易に穴が掘れない。雪は砂糖のやうに細かく、一度降ると

翌年五月までは解けず、河や湖や沼の氷は、その上に枕木を並べて鐵道を架け、汽車を駛らせても大丈夫である。この結氷時代が活動期であるから、よほど頑健なものでないと、滿蒙の天地には堪へられない。

堪へる

以前は滿蒙幾萬方哩の地も、鐵道の外には路らしい街道もなかつた。牛馬・車輛を通ずる橋一つさへなかつた。そこで結氷期を待つて交通・運搬の活躍が始まる。何千萬噸と稱する大豆その他の穀類が、或は橇、或は八頭曳の荷馬車によつて、北から南へと運ばれる。湖水の上でも、大河の上でも、個人の畑の上でも、勝手次第に往來する。

松花江・遼河、及び鴨綠江を滑る橇の輸送に至つては、確か

松花江　滿洲國にある河。黑龍江の一大支流。長さ約一八〇〇粁。

遼河　滿洲國の大河。長さ約一六〇〇粁。

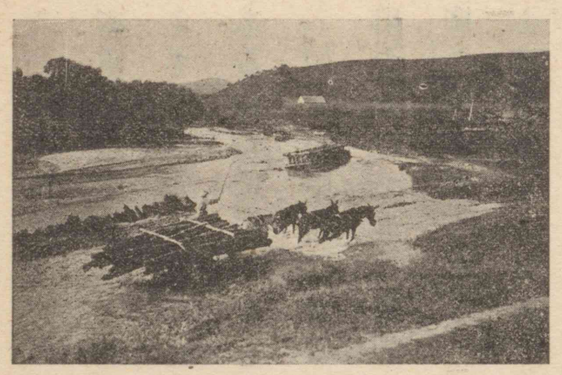
魁

黃塵萬丈

白髮三千丈　李白の詩中の句。

天地晦冥

に滿洲獨特の運搬法である。松花江の如く何百哩とある長い河の上を辷つて、特産物を輸送する荷馬車隊のためには、二十哩か三十哩毎に、臨時の宿屋が氷の上に開設される。暖國人は想像もつかないであらう。



木材を運ぶ

日本の春の魁は、梅の花と鶯の初音である。滿洲では黃塵萬丈が起つて、始めて地上の氷や雪が解け、春の日のまさに近きを知る。支那では「白髮三千丈」などと言はれてゐるが、滿蒙の黃塵だけは、萬丈は愚か、青天白日にしてなほ天地

越える。

柳絮
荷珠
梁の元帝
名は繹。支那六朝時代（西暦五三年頃）の皇帝。
翩々

晦冥、一米前も見えず、晝の日中に電燈をつけることさへある。この黄塵萬丈に乗じて、明治三十八年三月十日、皇軍は露軍を追撃し、奉天城を占領した。この黄塵は玄海灘を越えて、遙か九州地方、或は宇都宮地方の空を掩うたことさへあるから、驚かざるを得ないではないか。

四月の中旬になると、突如一夜にして地上に綠草が萌え出で、次いで菫や蒲公英が咲く、土筆が芽を出す。同時に楊柳の枝が青くなる。「柳絮春雪を飄して、荷珠水銀を漾はす。」とは、梁の元帝の名吟として後世に傳つてゐるが、楊柳の花の翩々として四散し、地に積つて雪かと思はれる美しい風景は、滿洲でないと見られない。

馥郁
フクイク。
百花爛漫

梅は盆栽以外にはない。春の魁に咲く花は、杏と李である。梅花より濃艶であるが、惜しいかな馥郁たる梅花の香を缺く。杏・李の花の散らない間に、梨・林檎、次は櫻、最後は桃と、百花爛漫、草も木も一時に花が開く。殊に美しいのは藤と胡藤の花盛りである。胡藤といふのは、アカシヤを詩的に和譯した名前で、僞槐（にせえんじゅ）のことである。五月の初旬に滿開となる。花には純白があり、淡紅があり、又淡青があり、ゴールデン・チェーンと言つて黄金色のものもある。初めは露西亞人が滿洲

滿洲の秋

芍藥　毛茛科に屬する多年生草本。ライラック　リラともいふ。沈丁花科に屬する常綠灌木。

杜鵑　ホトトギス。攀禽類に屬する鳥。

に移植したもので、旅順や大連の街路の並木に多い。櫻と藤とは、大和男子が母國を偲ぶために、第二の故郷へ日本から移植した、懷かしい憧れの花である。この他、石榴・牡丹・芍藥、野生のライラックなどの美しさに至つては、日本の花も到底及ばないほどの艶麗さを見せるのである。

かくて南滿洲の春は、昨日まで氷に鎖された天地が、俄然として百花爛漫、あらゆる禽鳥の囀る光景に一變する。鶯も、雲雀も、杜鵑も、何もかもけたゝましく囀り、恰も小鳥屋の前に佇むやうな感じがする。北滿になると、春も秋もない。冬から夏へ、夏から冬へ一足跳である。松葉牡丹が、地上に絨緞の如くに彩られ、玫瑰と呼ぶ紅白の野薔薇が、垣根に新

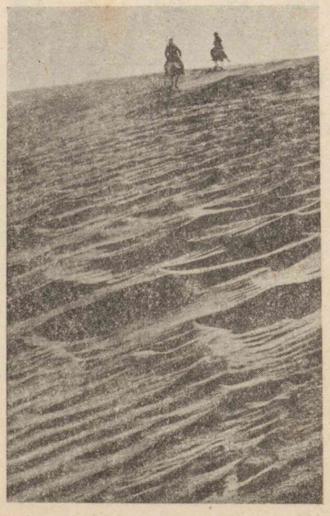
上田恭輔　ドクトル・オブ・フィロソフィー。滿蒙研究家。

勿忘草　紫草科に屬する多年生草本。

茜草　茜草科に屬する多年生草本。

哈爾賓　露西亞が松花江畔に建設したる都市。

裝を粧ひ、野に勿忘草や、茜草や、僅かに三四寸の豆燕子花などが咲亂れる頃は、早くも夏である。哈爾賓から北滿鐵道の沿線へかけては、漸く新綠になつたかと思ふと、五月の中旬には、既に氣溫が三十二度近くに昇り、毛衣を捨てるや否や、一躍して白服に白靴の世界と變る。



蒙古の砂丘

要するに滿洲の氣候は大陸的であつて、變化が激しいのであるが、我等の同胞がこの間に在つて縱橫に活動してゐるのは頼母しいことである。

（上田恭輔―新滿洲國寫眞大觀）

みやびやか

明治神宮　官幣大社。明治天皇・昭憲皇太后を奉祀す。東京市澁谷區にあり。

清々しい　スガスガしい。

二三　爽やかな心

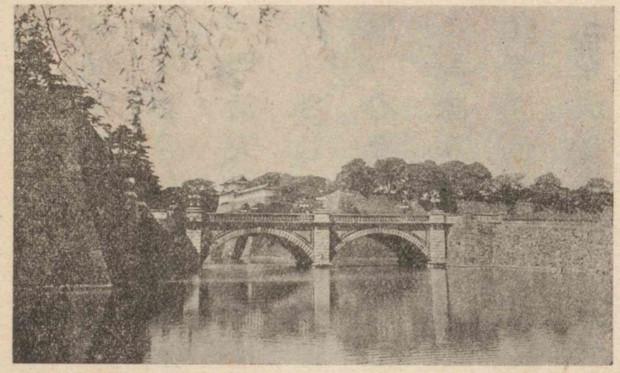
私どもは、晴れた日に、東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に晴々したみやびやかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひら〳〵と飜つてゐるのを見ますと、そこに活動的な活き活きとした氣分が起つてくるのであります。或はまた明治神宮に參拜いたしまして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居をくゞり、清淨な參道を吸込まれるやうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿の前に參りますと、自ら清々しい尊い氣

神聖

所謂　イハユル。

眞髓　シンズヰ。

分につゝまれてくるのであります。更にまた松の綠の滴るお濠の前に立ちまして、我が皇室の御繁榮を思ひますと、なんともいへぬ神聖な氣分が現れてくるのであります。



二重橋

これ等の神々しい、清々しい、晴々しい心持こそ、實に我々日本人が、遠い遠い昔から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育てあげて來た純眞なる心は、全く我が國民性の本質でありまして、所謂大和魂の眞髓

持たまほし

であります。かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充ち滿ちた心が、卽ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとく爽やかに持たまほしきは心なりけり

と、お詠み遊ばされてありますが、その爽やかな心は、取りも直さずかやうな純眞な氣分に外ならぬのであります。私どもがこの世に於て毎日々々の生活を營むに當りましても、最も必要な氣分であり、且價値のある態度は、誠にこの爽

屈託 クツタク。

天眞爛漫

やかな心にあります。

この爽やかな心は、晴々しい廣い心持であります。徒に物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、又濫りに他を排斥しない、穩かな心であります。この心からして偏りのない爽やかな氣分を味はふことが出來るのであります。爽やかな心は、明快な裏表のない心持であります。溫味のある、生々とした生活は、世の中で最も望ましい生活であります。僞らない正直な態度は、最も力強い生活であります。宗教の生命も亦こゝにあると信じますが、天眞爛漫は卽ち爽やかな心の本體であります。

爽やかな心は、かく淸らかで、溫味のある、生き〳〵とした

建設的

朝日の豐榮昇る　朝日が美しく榮え昇ること。

生活の原理

傳統的信念

看破　カンパ。

心持でありまして、建設的に、有意義に、總ての物を生かしてゆく所の積極的精神であります。所謂「朝日の豐榮昇る」氣分が、卽ちこの爽やかなる心の働であります。

我々日本人は、かういふ爽やかな心を根柢としまして、この尊い國體を築き上げ、この立派なる國民道德を形造つて來たのであります。我が國民精神の現れである神道は、卽ちこの爽やかな心を以て、その根本としてゐるのであります。神道については色々の説がありますが、畢竟はこの爽やかな心、純眞な氣分に生きる所の日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五

松坂　三重縣松阪市。

風靡

本居宣長　國學四大人の一人、伊勢松坂の人。享和元年歿。年七十二。（一七三九〇—一八〇一）

ひたすら

十年前に、伊勢の國松坂にあつて、天下の學界を風靡した本邦空前の大學者本居宣長でありますが、その本居宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人問はば朝日にほふ山ざくら花

といふのがありますが、この大和心も正しくこの爽やかな心の姿をたゝへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髓を發揮すべく努力した人であります。力を極めて、この日本人のもつてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗しさ、眞心の尊さを説いた人であります。さうして、ひたすらに我が皇室を崇め、我が國家を愛す

嫌味

る道を力強く主張した人であります。

朝日に匂ふ山ざくら花は、如何にも清らかであり、さうして單純にさつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しいとかいふところのない、清いみやびやかな姿であります。そこに私ども日本人としての心の特色が表れてゐるのであります。我々日本人の祖先は、かういふ心持を、明く淨く正しく直き心とも申しまして、道德の根柢となる心はこゝにあると信じて居つたのであります。

かゝる爽やかな大和心を本質とする神道は、たゞこのみやびやかな心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國家を愛して來たのでありますから、神道の信仰が人性の自然

鎭守の森

簡素

五十鈴川
三重縣にあり。皇大神宮の傍を流る。

に存してゐることは明かであります。神社は我が神道を形に生かした表現でありまして、彼の鳥居といひ、鎭守の森といひ、氏神の御社といひ、何れも皆清淨簡素といふことを尊んでゐます。そこにお詣りいたしますと、私たちの心は、自ら清々しい爽やかな氣分になつてしまふのであります。殊に、五十鈴川の清い流のほとりに、二千年の昔から鎭坐まします皇大神宮に詣りますと、何人も古歌に歌はれてゐるやうに、

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに
涙こぼるゝ

といふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに

情操

心ともがな。

感ぜられる尊い心が、卽ち日本人の神に對するありのまゝの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。

明治天皇の御製の中にも、

淺みどり澄みわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

といふ御歌がありますが、この氣分をもつてゐることが大切な心がけであります。この御詠を拜誦しますと、いかにも淸らかに爽やかな大御心を偲び奉らざるを得ないのであります。

思へば、もう二十餘年の昔になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。それは明治天皇

桃山の御陵

明治天皇の御陵。京都市伏見區桃山町にあり。

生薑

シャウガ。

の御一年祭の行はれた時のことでした。或小さい田舍町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、ほどよく隔つた處に竝びました老若男女は、その町長を首として、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。

その式に列つた町民たちは、何れも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳位の八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて、伏拜みましたが、やがて徐に、左の小脇から綺麗に束ねた一束の生薑を取出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一歩退いて一禮して立去つたので

目擊

河野省三　文學博士。國學者。國學院大學學長。埼玉縣の人。明治十五年生。

あります。これを目擊しました私は、誠に涙ぐましい感に打たれたのであります。

皆さん、我々日本人の心の底には、かういふ飾り氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゝへられてゐるのであります。私たちは、この心を日々の生活にうつしまして、物を清らかにし、心を爽やかにして、僞らざる力强い社會を築いてゆきたいものであります。私はこの爽やかな心を基礎とした生活を、常に快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目なところに、一番よく眞價を發揮するものであると信じます。

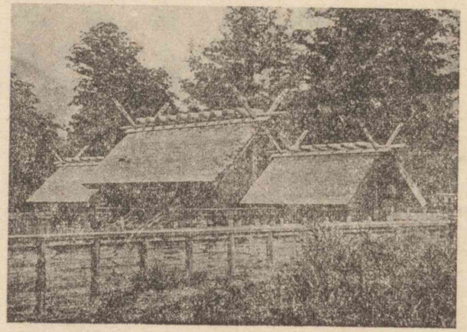
（河野省三）

山田　三重縣宇治山田市。
外宮　豐受大神宮。
內宮　皇大神宮。
數を讀む

二三　伊勢參宮

俄かに參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立ち、けさ十時に山田に著きました。まづ外宮を拜んで、次に內宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に內宮の畏さは言語に盡せません。五十鈴川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口をすゝいで、頭上に茂る神杉を仰ぎ見た。さうして、名も知らぬ鳥の奧深く啼く音に耳を澄ましつゝ、綠青色の苔に寂びた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立並んでゐる間をたどつて暫く進むと、やがて木立の奧、塀の彼方に千木・堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで

塀の内に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に搖られ、その奥に疎に立つた神杉に護られて、御白石のぎつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。さうして傍に竝んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聽入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた敬虔な姿を思ひ浮べました。



内宮

忝さに云々
「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる。」

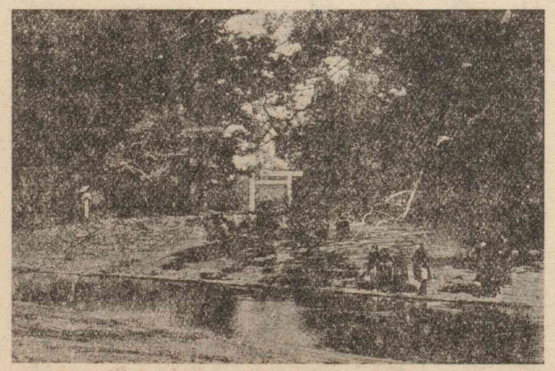
敬虔
ケイケン。

直き清き強きこゝろをあらはしてすく〳〵立てり

たふと神杉

まことにこの御社の御杉は、樹木の神々しさを極度に表したもののやうに思はれます。

私共は内宮の御後の神杉の根方から、一片の苔を採つて、押戴いて懷にし、御手洗川に口をすゝいで、をりしも笙・篳篥の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうして、かへりみかへりみ宇治橋を渡つて、昭憲皇太后の愛



御手洗川

御手洗川
ミタラシガハ。五十鈴川をさす。

笙
シャウ。

篳篥
ヒチリキ。

宇治橋
五十鈴川にかけたる橋。

志摩　國名。三重縣の東南部。
朝熊山　三重縣度會郡にあり。
神路山　カミヂヤマ。內宮の神苑をめぐる山林。
御裳濯川　ミモスソガハ。五十鈴川のこと。
皇大神宮儀式帳　二卷。延曆二十三年（一四六四）に伊勢神宮にて成りし書。
鞆　トモ。弓を射る時に左の臂ん結びつくる道具。

で聞し召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩境の名山朝熊山に走らせました。

御社のうしろの御門をろがみてひとかけの苔をいたゞき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を車に搖られながら、私はこの神境が大神の大御心にかなつたいはれを考へました。皇大神宮儀式帳に、

度會（わたらひ）の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御意鎭まります國と悅び給ひて、大宮定めまつりき。

煩累　
皇御孫　スメミマ。
率ゐられる

五十嵐　力　文學博士。國文學者。早稻田大學教授。山形縣の人。明治七年生。

とあるを見れば、第一には、山水の景色のたぐひなきを愛でさせられたのであらう。第二には、地勢・氣候・風土のうるはしきを愛でさせられたのであらう。第三には、土地に永久な平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう。最後には、一切の消極的煩累に煩はされずして、皇御孫に率ゐられる大和民族の積極的・光明的發展を見そなはすに都合のよい、氣の落著く境と思はせられたのであらうなどと考へながら、をり〳〵車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中に、いつか朝熊山の麓に著きました。

（五十嵐　力―我が書翰）

本質的
外形的
形式的

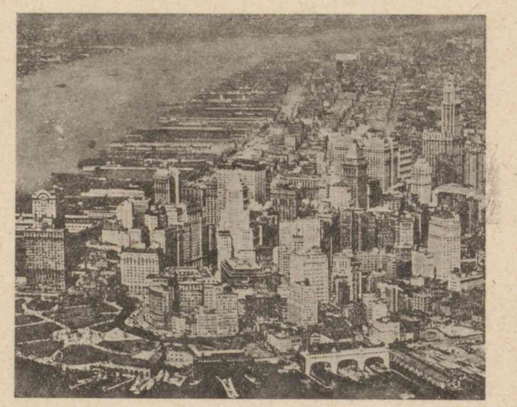
自修文

一　蟻と蜜蜂と鳩

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。併し、その勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本質的の差がある譯はないけれども、英・佛人の勤勉性の差は、單に外形的・形式的相違だけには止まらぬやうである。それは兩國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らば、其の國民性は如何に相違して居るだらうか。こんなことを考へながら、私は一人でよくパリーの公園を歩いてゐた。そしてこれにアメリカを今一つ加へて、よく三國の國民性を比較して見た。

反映
ハンエイ。

躍動
いきいきと動いてゐること。



ニューヨーク

三國の特色は、その大都會に於て著しく眼に著く。それは都會はその國の國民性を最も鮮かに反映して居るからである。多くの人はニューヨークはあまりに歐洲化して居ると言ふが、併し、ニューヨークに一日居ると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずには居られない。ニューヨークはやはり米國である。そして、ロンドンは英國であり、パリーは佛國である。——恰も東京が日本であるやうに。

話はまた英・佛人の勤勉性に還る。朝早くパリーの街を歩くと

鋪道　ホダウ。
凱旋門　エトアール廣場の中央に立てる大凱旋門。一八〇六年、ナポレオンが墺露軍を撃破したる記念に建設せるもの。
象徴　シャウチョウ。
灑ぐ　ソソぐ。
クールヴァン　佛國の女流小説家。

石の鋪道の上には、もう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舍と共に、心地よい朝の活動を象徴して居る。黒い質素な著物を著た女達が、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を灑いだりなどして居る。

ロンドンの下町に晝頃行くと、狹い側道の上に、商館や銀行などの事務員かと見える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙しげに往來して居る。私はこの群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易を机の上でやつて居る、この人々の日常生活を考へた。そして、フランス人とは種類の違ふこの人々の勤勉さをも考へた。こんな時には、何時もフランスの小説家クールヴァンの言葉が腦裡に閃いた。「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、

日盛り　太陽の盛んに照るとき。
健氣　ケナゲ。かひがひしいこと。

英國人は蟻のやうに精勵である。」と。パリーとロンドンの生活を見て居る内に、この言葉の深い意味が、日一日と自分の頭腦に深く沁みて行つた。晴れわたつた初夏の日盛りに寸刻の隙もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、如何にもよく佛國人の朝起の心持を現して居るやうに思はれた。そして、來るべき冬の支度の爲、營々として重い餌を引摺つて行く健氣な蟻の精根が、如何にもよく英國人の勤勉を現して居るやうに思はれた。

ロンドン

それならば、米國人のあのいら〳〵した忙しさは、何に喩へられ

ようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮んで來た。何時行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が、我劣らじと押しあひへしあひ、地上の豆を拾つて居る。物音に脅かされて飛立たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へて何時までも餌を拾つて居る。米國人の勤勉は正にこの鳩のやうに餘裕がないと私には考へられた。

朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乘る人々は、これが此の世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるやうな雜沓を目擊する。或日、私は汽車の切符を買ひに市内營業所まで行つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人が、私の行先と列車とを聽き取り、やがて右手の袖を一寸捲り上げて、鉛筆持つその手を、

觀音堂　東京市淺草公園内にある金龍山淺草寺。

押しあひへしあひ

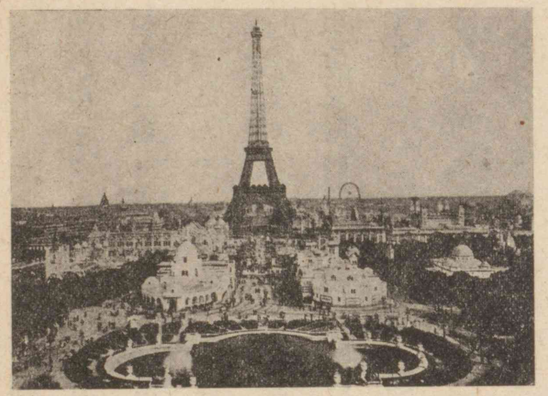
阿鼻叫喚　アビケウクワン。地獄の苦み。

雜沓　ザツタフ。多數の人がこみあつてゐること。

呆氣に取られる

結局　つまり。

切符の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣に取られて居ると、忽ちかつと手を紙の上に落して、する〳〵と切符の文字を眼の廻るやうな早さで書き終へた。只今手を振つたのは、結局手に運轉を附ける爲だつた。私は噴出すやうな可笑しさを感じた。何もさう手に運轉を附けないでも、大して時間に相違もなく字が書けようし、また運轉を附ける時間だけ無益のやうな氣がした。



パリー

その翌年、私は英國の商務院の鐵道局に賃金引上の一覽表を貰ひに行つた。すると、係の若い英國

抽出ヒキダシ、

件クダン。

タイピストタイプライターを打つ人。

紳士が「たしかにこの机の中に一枚だけ統計表を入れて置いた筈だ。」と言つて、自分の机の抽出を開けた。私は見るともなくその抽出の中を覗込んで見て驚いた。まあ、何といふ多數の書類だらう、累々と種々な紙片が、堆積されてゐる。それを件の若い紳士は、手を突込んでがさ〳〵と搔廻して、「此處にはない。」と言つて、次の抽出またその次の抽出を開け、そして、最後の抽出の底から、やつと賃金表を見附け出した。「これは差上げる譯に行かないから、此處で見て下さい。」と言ふから、「一度見ただけではとても覺えられませんね。」と答へると、一寸當惑して、「それでは私が寫してあげませう。」と言つて、それを別の白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍に居る若い女のタイピストに命じて、一分間内に寫させるところであるが、件の若い紳士は、先づ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原

本の統計表を置いて、その上に白紙を當てて書き出した。私は一寸面喰つた形で、この異樣な淨寫法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。そして、今度はその白紙を左手で持上げて、下の原本を覗いて次の行の數字を諳記して、また白紙をその上にぺたりと置いて、諳記しただけ書いて、また前のやうに紙を持上げて原本を覗き、また其の上にかさねて書いた。不思議なやり方だと見て居ると、やがて書終へた。インキが乾いて居ない。そこで、今度は其の紙と原本と二枚持上げて、下敷になつて居る吸取紙の上に裏向きに置いて、丁寧にインキを拭き取つて、さて私にその淨書をくれた。ニューヨークから到著したばかりの私は、全く呆氣に取られて此處を出て行つた。

その春、パリーの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れない

抹消　マッセウ。ぬりけすこと。

鶴見祐輔　政治家。群馬縣の人。明治十八年生。

私は、誤つて受取人の欄へ自分の住所・姓名、差出人の欄へ先方の住所・姓名を書いてゐた。これを局の小窓から差出す時、私はふと氣附いて、「おや」と言ふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と書いた。なるほど、これで送票は完成した譯である。而もそれがほんの一瞬間だつた。私は全く感服してしまつた。そしてニューヨークの切符賣と、ロンドンの役人と、パリーの郵便局員とを頭の中で列べて見た。——鳩と蟻と蜜蜂と。（鶴見祐輔—三都物語）

さし柳さしていく日も經ぬものを根ざし
ひき見る友童かな

（大隈言道）

井堰　キセキ。田に注ぐ用水を止め、又加減するもの。

井伊直弼　近江彦根藩主。德川幕府の大老。萬延元年三月三日、櫻田門外に暗殺せらる。年四十六。（一八四七五—一八五二〇）

用人　ヨウニン。江戸時代に大名旗本に近侍して樞要の事に當りし者。老臣の次に位す。

小姓　コシヤウ。貴人に近侍して雜用を勤むる者。

二　井堰を切る

人物

大老　井伊直弼　　大老の舊師　仙英禪師

大老の用人　宇津木六之丞　　左官利八

大老の小姓　小河原秀之丞

時　安政五年の秋

所　江戸の井伊侯の邸

十二疊の居室、廻縁、黑柿の柱の床の間には古めかしい一軸、次の室との間は芭蕉布張りの襖で劃られ、一方に丸窓がある。縁先の沓脱石から少し隔つた所に黃菊・白菊の鉢植が竝べてある。下手寄りには葉の散りかけた楊柳の古木、破れ芭蕉、上手は屋根附の橋廊下が向うの奥殿の棟へつゞいてゐる。そこらの植込みには紅葉も混つて、その間から奥

黒柿　クロガキ。柿の木屬の植物の中心部に見ゆる黒色の縞ある材。
芭蕉布　芭蕉の纖維にて織りたる布。芭蕉は芭蕉科に屬する多年生草本。
楊柳　柳科に屬する落葉喬木。
褥　シトネ。
膳部　膳に具ふる食物。料理のこと。

深い庭の一部が見えてゐる。用人六之丞入來る。眼を鋭く働かせて居室を檢める。小姓秀之丞刀を捧げて入り刀架にかけ、褥を直す。井伊大老これに坐す。

くつろいだやうに、

井伊　六之丞。今日も生きて歸つた。あゝ、またあの菊がみられる。見事に咲いてゐるな。

宇津木　はつ、無事にお歸り遊ばして、ほつと致しました。毎日毎日、お顔を見るまでは胸の心配が晴れません。

秀之丞の捧ぐる茶を飲む。

井伊　いや旨い。殿中ではお茶一つうつかり飲めないからの。

宇津木　お大抵ではございませぬ。殿には御空腹かと存じますが、例の通りお膳部を差出させませうか。

井伊　いや、今日は家から持參した例の餅の分量が多かつた。お

おかちん　餅の一名。
江州　近江の國をいふ。滋賀縣の全部を占む。
祖師　一派の宗門を開きたる人。
控へて

かちん腹……いや餅腹だから持ちがいゝよ。はゝゝゝ。膳部はもつと後でよろしい。

宇津木　お疲れの所へ早速申上げるもいかゞかと存じますが、江州清涼寺の仙英禪師殿が、祖師の御年忌とやらで、急に思ひ立つて江戸へ上られましたので、一寸御目通りが願ひたいといふことで、あちらに控へて居られますが、いかゞ取計らひませう。

井伊直弼

嬉しげに、

井伊　なに、仙英和尚が？……それは〳〵珍客ぢや。何日までも、當邸にお泊め申して御歓待せい。早速御目に掛らう。

中仙道　京都より東京に達する街道。東海・北陸兩道の中間を通ずる山道の義。
歸山　寺へかへること。
書院　もとは書齋のこと。こゝは客殿。
開帳　廚子を開きて佛像を拜ますこと。出開帳は、書院へ出でて面會することを戯れていふ。
清癯　セイク。身體がやせてほつそりしてゐること。

宇津木　は、……實は明日、中仙道から御歸山のやうなお話でございました。……では、書院へ御出でなされますか。

井伊　明日お歸り？……それはあんまりお名殘惜しいな。禪師と予とは師弟の交りぢや。書院への出開帳には及ぶまい。

宇津木　此處が却つて心安くてよからう。御通し申せ。

井伊　は、畏まりました。

退場。

井伊　師の御坊に、ゐながらお目にかゝれようとは思ひもよらなかつた。これも不思議な佛緣であらう。……暗くなつた。秀之丞、燈火を點けい。

仙英和尚は、清癯鶴の如き老禪師、六之丞に案内されて入り來る。

恭しく一禮。

地獄で佛　健か　スコヤか。
一揖　イチイフ。
逗留　トウリウ。

井伊　これは〳〵ようこそ……。思ひがけないことで、地獄で佛といふのはこのことでございませう。相變らず御健かで結構でございます。

一揖。

仙英　私もひよつこり江戸へ出て來ましたのぢやが、つい貴方の顏が見たうなつて。

いひ〳〵、じつと大老の顏を見すゑて言葉を切る。

井伊　何卒、暫く當邸へ御逗留なされては？

默つて暫く見すゑてゐたが、

仙英　井伊公、貴方は、日本の爲に、今大難に出逢つてゐられるな。

井伊　は、如何にも、大難に出逢つてゐます。

仙英　さうぢやらう。右へ向いても左へ向いても、上を見ても下

劍難　刀劍で殺傷せらるゝ災難。

かげ腹を切る　存ふ　ナガラふ。

を見ても、白刃の劍で八方塞がりぢや。劍の山のまん中につつ立つてゐられるのぢやな。

井伊　は、如何にもおつしやる通りでございます。

仙英　貴方の顏には、劍難の相があり〳〵と出てゐます。

井伊默す。

宇津木　えつ！あの劍難の御相が？

仙英默つて頷く。

井伊　は、實は、かげ腹を切つて、生き存へてゐる氣で居りましたが、今の御一言で私の行くべき途がはつきり見えました。有難う存じます。

仙英　いや、さすがは井伊公……それでまづ安心しました。……時に、一人お供がある。身分違ひぢやから、大老樣の御前へは出

埋木の舍の澍露軒　部屋住時代の學舍の名。

寵愛　チョウアイ。氣に入つて可愛がること。

舍利　シャリ。

られぬ。御多忙の折柄、正式でない、ほんのお茶一服立てて戴いて、このお室をそのまゝ、昔の埋木の舍の澍露軒にしたら仔細なからうと思ふが、どうでございませうな。

井伊　委細心得ました。お供は誰でございませう。一寸見當が附きかねますが、逢へば分りますな。秀之丞、薄茶を立てい。お供は何卒此方へ。六之丞、御案内せい。

宇津木　は、……

六之丞と秀之丞は立つて行く。

仙英　はあ、昔ながらに楊柳の樹が御寵愛と見えて、この樹はいつも井伊公の影身に添うて植ゑられてゐますな。

井伊　それも秋に逢うては葉が散り〳〵で、あゝして骨許りになつてぼつねんと立つて居ります。だが、たとへ骨が舍利にな

つても、楊柳はやつぱり楊柳に相違ありませんでな。

仙英　御尤もでござる。

六之丞、粗末な衣裝の老人、左官屋利八を連れて入り來る。

宇津木　お連れ申しましてございます。

利八　殿樣……左官屋利八めでございます。

井伊　あゝ誰かと思つたら、昔の茶友達、左官屋利八か。よく來てくれた、よく來た。仙英和尙殿と同道で江戸へ出たのか？

仙英　一生に一度、江戸が見て死にたいといふことで、一緒に來ましたぢや。

利八　お蔭で江戸も見物しますし、大老樣にも御目にかゝれまして、もう心置きなく成佛ができます。はい……大した御出世でございますな。

成佛

景氣

黑船　江戸末期に外國より來たる大船の稱。多く船體を黑く塗りしよりいふ。

脾腹　ヒバラ。橫腹をいふ。

中村吉藏　劇作家。早稻田大學教授。島根縣の人。明治十年生。

井伊　いや、お前と逢へば、昔ながらの部屋住の鐵之介に戻つたやうな氣持がする。どうぢや、近頃世間の景氣は？

利八　だめでございます。黑船が來て、愈、貿易が開けると、何でも異人が金銀をさらつて行くのだと申しましてな、米の値がどんどん上ります。さうして、皆、難儀をして居ります。

宇津木　これ〳〵、御前でそのやうなことを……

井伊　いや構はぬ。ありの儘を聞かせてくれるからよいのぢや。……成程な、あの近江の湖水の井堰を急に切つて落したら、川下の小魚は、一時みな脾腹をかへさうも知れぬ。開港が總ての國民に智慧と富とを貢いでくれるまでには、長の月日がかからう。それまでは井堰の口を切つた者は、皆に呪はれよう。

仙英　御意の通りぢや。

（中村吉藏―井伊大老の死）

首尾　物事のなりゆき。

推參　スヰサン。無禮なこと。

三　吾輩と勘左衞門

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられてゐる。緣側と平行してゐる一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。吾輩の始めた運動は、垣巡りといつて、この垣の上を落ちないやうに一周するのである。これは、やり損ふこともまゝあるが、首尾よくゆくと御慰みになる。ことに處々に根を燒いた丸太が立つてゐるから、一寸休息に便宜がある。

今日は出來がよかつたので、朝から晝までに三遍やつてみたが、やる度にうまくなる。うまくなる度に面白くなる。たうとう四遍繰返したが四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで來て、一間ばかり向うに列を正して止まつた。これは推

分際　ブンザイ。

猶豫　イウヨ。

姿勢

參な奴だ、人の運動の妨げをする、殊に何處の烏だか籍もない分際で、人の塀へ止まるといふ法があるものかと思つたから、一通るんだ、おい退き給へ。」と聲をかけた。眞先の烏は此方を見て、にや〳〵笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何か食つて來たに違ひない。

吾輩は返事を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。烏は通稱を勘左衞門といふさうだが、成程勘左衞門だ。吾輩がいくら待つてゐても、挨拶もしなければ飛びもしない。吾輩は爲方がないから、そろ〳〵歩きだした。すると眞先の勘左衞門がちよいと羽を廣げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢を變へただけである

此の奴め、地面の上ならその分に捨置くのではないが、如何にせ

餘裕 ヨユウ。
逗留 トウリウ。
人體 ニンテイ。
天狗の申し子

ん、たゞさへ骨の折れる道中に、勘左衞門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて、また立ちどまつて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一、さう待つてゐては足がつゞかない。先方は羽のある身分であるから、こんな處には止まりつけてゐる。從つて氣に入ればいつまでも逗留するだらう。こちらはこれで四遍目だ。たゞさへ大分疲れてゐる。況んや綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障碍物がなくてさへ落ちないとは保證が出來ないのに、こんな黑裝束が三個も前途を遮つてゐては、容易ならざる不都合だ。愈〻となれば、自ら運動を中止して垣根を下りるより爲方がない。面倒だから、いつそさうしようか。敵は大勢の事ではあるし、殊には餘り此の邊には見馴れぬ人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子のやうだ。どうせ質のいゝ奴

看過 カンクワ。
體面にかゝはる
烏合の衆
癇癪 カンシャク。

でないには極つてゐる。退却が安全だらう、餘り深入をして萬一落ちでもしたら、尙更恥辱だと思つてゐると、左向けをした烏が「あはう。」と言つた。次のも眞似をして「あはう」と言つた。最後の奴は御丁寧にも「あはう、あはう。」と二聲叫んだ。如何に溫厚なる吾輩でも、これは看過出來ない。第一、自己の庭內で烏輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはりやうがなからうといふなら、體面にかゝはる。決して退却は出來ない。諺にも「烏合の衆」といふから、三羽だつて存外弱いかもしれない。進めるだけ進めと度胸を据ゑて、のそ〳〵と歩き出す。烏は知らん顏をして、何か御互に話をしてゐる樣子だ。愈〻癇癪に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に合はせてやるんだが、殘念な事にはいくら怒つても、のそ〳〵としか歩かれない。

先鋒

霊妙（レイメウ）。反應を呈す

漸くのこと、先鋒を去ること約五六寸の距離まで來て、もう一息だと思ふと、勘左衞門は申しあはせた樣にいきなり羽搏きをして一二尺飛び上つた。其の風が突然吾輩の顏を吹いた時、はつと思つたら、づい蹈外して、すとんと落ちた。

これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽とも元の處に止まつて、上から嘴を揃へて、吾輩の顏を見下してゐる。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を圓くして少々唸つたが、益〻駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味が分らぬ如く、吾輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾輩は今まで彼等を猫として取扱つてゐた。それがわるい。猫ならこの位やれば確かにこたへるのだが、あいにく相手は烏だ。烏の勘公とあつて見れば、致し方がない。

機を見るに敏

夏目漱石　名は金之助。英文學者。小說家。東京市の人。大正五年歿。年五十。

機を見るに敏なる吾輩は到底駄目と見て取つたから、綺麗さつぱりと緣側へ引上げた。

（夏目漱石―吾輩は猫である）

片假名・平假名の字源

	片假名	平假名
	ア阿	あ安
	イ伊	い以
	ウ宇	う宇
	エ江	え衣
	オ於	お於
	カ加	か加
	キ幾	き幾
	ク久	く久
	ケ介	け計
	コ己	こ己
	サ散	さ左
	シ之	し之
	ス須	す寸
	セ世	せ世
	ソ曾	そ曾
	タ多	た太
	チ千	ち知
	ツ川	つ川
	テ天	て天
	ト止	と止
	ナ奈	な奈
	ニ二	に仁
	ヌ奴	ぬ奴
	ネ祢	ね祢
	ノ乃	の乃
	ハ八	は波
	ヒ比	ひ比
	フ不	ふ不
	ヘ部	へ部
	ホ保	ほ保
	マ万	ま末
	ミ三	み美
	ム牟	む武
	メ女	め女
	モ毛	も毛
	ヤ也	や也
	ユ由	ゆ由
	ヨ与	よ与
	ラ良	ら良
	リ利	り利
	ル流	る留
	レ礼	れ礼
	ロ呂	ろ呂
	ワ〇	わ和
	ヰ井	ゐ爲
	ヱ慧	ゑ恵
	ヲ乎	を遠
	ン（尓の假名ムより）	ん（无？）

國語假名遣表

最モ少キゐヲ語記スベシ。其ノ外ハいカひナリ。

ゐ

ゐ（井・堰）
ゐなか（田舍）
ゐもり（蠑螈）

ゐ（居）
ゐざり（膝行）
ゐしき（臀）
かもゐ（鴨居）
しきゐ（閾）
くもゐ（雲居）
くらゐ（位）
しばゐ（芝居）
とのゐ（宿直）
とりゐ（鳥居）
まとゐ（團欒）
もとゐ（基）

ゐ（猪・亥）
ゐくび（猪頸）
ゐのこ（豕）
ゐのしし（猪）
いぬゐ（乾）

ゐ（蘭）
ふとゐ（莞）

あゐ（藍）
くれなゐ（紅）

あぢさゐ（紫陽花）

うなゐ（髫髮）

かたゐ（乞食）

くわゐ（慈姑）

せゐ（所爲）

なゐ（地震）

ゐる（率）
ひきゐる（率）
もちゐる（用）

まゐる（參）

語頭ニテハ**い・ゐ**ガ紛レ易シ。前掲ノ**ゐ**ノ外ハ皆**い**ナリ。語中・語尾ニテハ**い・ゐ・ひ**ガ紛レ易シ。前掲ノ**ゐ**ト左記ノ**い**ノ場合ノ外ハ**ひ**ナリ。

おい（老）

くい（悔）

むくい（酬）

音便（**き・し**）ガ（**い**）トナルモノ。

さいはひ（幸）
たいまつ（松明）
ついぢ（築地）
ついたち（朔）
ついたて（衝立）
ついで（序）
やいば（刃）
かうがい（笄）
きさい（后）
かいて（書きて）
さいて（指して）
ないて（泣きて）
あしい（悪しき）
おもい（重し）
かなしい（悲しき）

ゑ

少數ノ**ゑ**ヲ語記スベシ。其ノ外ハ**え**カ**へ**ナリ。

ゑ（繪）
ゑがく（畫）
ゑどる（彩）
ともゑ（巴・鞆繪）

ゑ（餌）
ゑづく（嘔吐）

ゑ（穢）
ゑど（穢土）

ゑじ（衞士）

ゑぼし（烏帽子）

ゑんじゆ（槐）

こゑ（聲）

すゑ（末）
こずゑ（梢・木末）

つくゑ（机）

つゑ（杖）

ゆゑ（故）
ゆゑん（所以）

ゑむ（笑）
ゑがほ（笑顏）
ゑくぼ（靨）
ゑつぼ（笑壺）

ゑふ（醉）

ゑる（彫）

ゑぐる（刳）

うゑる（飢・餓）

うゑる（植）

すゑる（据）
すゑもの（陶器）
いしずゑ（礎）

ゑぐし（鹼）

語頭ニテハ**ゑ・え**ガ紛レ易シ。前掲ノ**ゑ**ノ外ハ皆**え**ナリ。語中・語尾ニテハ**ゑ・え**ガ紛レ易シ。前掲ノ**ゑ**ト左記ノ**え**ノ場合ノ外ハ**へ**ナリ。

え

え（兄）
きのえ（甲）
ひのえ（丙）
つちのえ（戊）
かのえ（庚）
みづのえ（壬）

え（枝・柄）
しづえ（下枝）
ずはえ（條）
ながえ（轅）

え（江）

ふえ（笛）
のどぶえ（吭）

ぬえ（鵺）

ひえ（稗）
ひえどり（鵯）

さざえ（螺螺）

あえる（肖）

あまえる（甘）

いえる（癒）

いばえる（嘶）

おびえる（脅）

おぼえる（覺）

きえる（消）

きこえる（聞）

こえる（越）

こえる（肥）

こごえる（凍）

すえる（饐）

はえる（映）
ゆふばえ（夕映）

はえる（生）
ひこばえ（蘖）

ふえる（殖）

ほえる（吠・吼）

みえる（見）

もえる（燃）

もえる（萌）
もえぎ（萌黃）

もだえる（悶）

語頭ニテハ**お・を**ガ紛レ易シ。左記ノ外ハ**お**ナリ。

を（男・雄・夫・牡）
をす（牡）
をつと（夫）
をとこ（男）
をひ（甥）
たけを（猛男）
ますらを（丈夫）
ひやびを（風流男）
めをと（夫婦）
ををし（雄々）

を（小）
をぢ（伯父・叔父・老翁）
をば（伯母・叔母）
をとめ（少女）

を（峯・岑）
をのへ（峯上）

を（尾）
をばな（尾花）

を（緒）
をどし（緘）

を（麻・苧）
をけ（桶）
をさ（簇）
をだまき（苧環）

をか（岡・丘・陸）
をかぼ（陸稻）

をぎ（荻）

をけら（朮）

をこ（愚・痴）
をこがまし（痴）

をこぜ（鱧）

をさ（長）

をし（鴛鴦）

をしかは（韋）

をそ（獺）

をち（遠）
をちこち（遠近）
をとし（一昨年）
をとひ（一昨日）

をとり（囮・媒鳥）

をの（斧）

をみな（女）
をみなへし（女郎花）

をり（檻）

をり（節）

をろち（大蛇）

をがむ（拜）

をかす（犯・冒）

をさむ（治・修・收・藏・納）

をしふ（教）

をどる（踊・跳・躍）

をののく（慄）

をはる（終・卒・了）

をめく（叫）

をる（居）

をる（折）
をしき（折敷）
しをり（栞）
つづらをり（九十九折）

をかし（可笑）

をさなし（幼）

をし（惜）

をさをさ（大抵）

語中・語尾ニテハ**お**ハ用ヒズ。**を・ほ**ガ紛レ易シ。

左記ノ外ハ皆ほナリ。

あを（青）
あをがひ（青貝・螺鈿）
いさを（功・績）
うを（魚）
かつを（鰹）
ひを（氷魚）
さを（竿・棹）
たをやか（嬋妍）
たをやめ（手弱女）
とを（十）
ばせを（芭蕉）
みさを（操）
みを（澪・水脈）
みをつくし（澪標）
わざをぎ（俳優）
かをる（香・薫）
しをる（萎）
まをす（申）
しをらし（可憐）
やをら（徐）

ふ

ふノ假名ヲ**を**ト發音スル場合。

あふひ（葵）
あふぐ（仰）
あふぐ（煽）
あふぎ（扇）

あふる（煽）
あふち（楝・樗）
あふみ（近江）
とほたふみ（遠江）
きのふ（昨日）
けふ（今日）
さふらふ（候）
たふる（仆・倒）
たふとし（貴）
はふる（投）
ふくろふ（梟）
かげろふ（陽炎）

わ

語中・語尾ニテハ**わ**・**は**紛レ易シ。左記ノ外ハ**は**ヲ用フ。

あわ（泡・沫）
みなわ（水沫）
いわし（鰯）
うらわ（浦回）
くつわ（轡・口輪）
くるわ（郭）
くわゐ（慈姑）
ことわざ（諺）
ことわり（道理）
こわいろ（聲色）
こわね（聲音）
こわだか（聲高）

さわやか（爽）
しわ（皺）
しわむ（皺）
たわやか（嬋妍）
たわやめ（手弱女）
たわら（俵）
のわき（野分）
はらわた（腸）
ひわ（鷽）
あわつ（周章）
あわただし（倉皇）
うわる（植）
かわく（乾・渇）
ことわる（斷・理）
さわぐ（騒）
すわる（坐）
たわむ（撓む）
しわし（吝）
よわし（弱）

ゐ

少數ノゐヲ語記スベシ。左記ノ外ハじヲ用フ。

ゐ（父）
をぢ（伯父・叔父・小父）
おぢ（爺・祖父）
ゐ（路）
こうぢ（小路）
みそぢ（三十）

ず

少數ノずヲ語記スベシ。左記ノ外ハづヲ用フ。

ずず（數珠）
ずみ（桷）
ずはえ（條）
あんず（杏子）

あぢ（味）
あぢ（鯵）
あぢさゐ（紫陽花）
うぢ（氏）
かぢ（梶）
かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）
ふぢ（藤）
くぢら（鯨）
こうぢ（麹）
ことぢ（琴柱）
すぢ（筋）
ひぢ（臂）
なんぢ（汝）
ねぢ（螺旋）
ねぢく（拗）
もみぢ（紅葉）
わらぢ（草鞋）
なめくぢ（蛞蝓）
ちぢむ（縮）
よそぢ（四十）

ゆず（柚子）
いしずゑ（礎）
かず（數）
きず（傷・疵・瑕）
くず（葛）
すず（鈴）
すず（錫）

すずき（鱸）
すずし（生絹）
すずしろ（蘿蔔）
すずな（菘）
すずめ（雀）
すずり（硯）
ねずみ（鼠）
はず（箸）

ゆはず（弭）
はずみ（機）
みみず（蚯蚓）
もず（百舌鳥・鵙）
ずす（誦）
たたずむ（佇）
なずらふ（準）
ひずむ（歪）

まず（雑・交・混）
ずるし（狡猾）
すずし（涼し）
かならず（必）
すずろ（漫）

さ行變格活用ノ濁レルモノ。例ヘバ、禁ず・信ず・論ず

昭和十六年十二月九日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用・實業學校國語科用

昭和十二年六月十五日印刷
昭和十二年六月二十日發行
昭和十二年十二月卅一日訂正再版印刷
昭和十三年一月六日訂正再版發行
昭和十六年十月廿六日訂正三版印刷
昭和十六年十月三十日訂正三版發行

新撰女子國語讀本（全八冊）
定價各金六拾錢

編者　佐佐木信綱
編者　武田祐吉
東京市神田區小川町三丁目二六番地
發行者　湯川松次郎
大阪市西區阿波座中通二丁目四番地
印刷者　井下精一郎

發行所　東京市神田區小川町三丁目二六番地
大阪市南區順慶町一丁目五十三番地
湯川弘文社

水戸千枝子

広島大学図書
2000301495
庫
1
95